
甘く切ない愛しさを。

如月らむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘く切ない愛しさを。

【Nコード】

N5829Q

【作者名】

如月らむ

【あらすじ】

大手化粧品メーカー企業・社長を親に持つ、次男<アキ>と長女<みゆ>。家柄ゆえのシガラミと血縁に縛られつつも、甘い愛に：愛欲に溺れゆく愛しく切ない大人兄妹・極上の禁断Love Story。愛しくて、たまらなくて：私たちは今日も、極上の禁忌を犯す。

イジワルS兄との禁忌Loveシーン・多数アリ。中盤からはとにかく切ないです。※序盤は控えめですが、後々濃いめの性描写を含む予定です。

— My memories — (前書き)

ねえ。アキ：私 思うの。

兄妹に生まれ育ったことも
罪に溺れるほど愛し合ったことも

きつと——『運命』だった。

— My memories —

：——遙か、遠い 「兄妹」の優しい記憶を

あなたは 覚えていますか？

柔らかな温かさに包まれながら無垢な心が残した 愛しい 記憶を
…、

大切すぎて 失うことのできない愛を知った心が映し出す 切ない
記憶を…。

「運命」という名の奇跡が与えてくれた 初めての出逢い 初まり
のカンケイ

その 過ぎ去りし 淡く 夢のような思い出たちを

あなたは いくつ。覚えていますか——？

小さな頃から私は、8つ上の「タカにい」と5つ上の「アキ」
この2人の頼もしいお兄ちゃんに守られていた。

『タカにいーアキーミでミてえー！おサカナさんがいっぱーい♪』

お兄ちゃんたちがよく連れて来てくれた、近所にある大きな公園
そして向かう先はいつも公園の中央に広がる、大きな池にまたがっ

た橋の上

その頃は年齢制限でボートにはまだ乗れなくて、
アヒルの形をしたボートに抱いた憧れから目を背けるように
私は、ただ：ただ。橋の上から静かに揺らめく水面を見つめていた。

「おーいあんま身イ乗り出したら落っこちんぞーお！」

すると：離れた距離でケラケラと豪快に笑っているいつでも陽気な
タカには
いつものように、遠くも温かな目でいつも私を見守っていてくれて：

『だってーもーちよつとでおサカナさんつかめそうー！！』

「ばーか。んな短い手で掴めるわけねーだろう？」

ほら。来いよ、：みゆ」

すぐ後ろで両手を差し伸べているもう一人のお兄ちゃんは、
口が悪い上に無愛想だからいつもどこか冷めた空気を漂わせている
のだけれど
何だかんだ言いながらも私の一番近くにいてくれたのは、アキだっ
たよね。

そう：私の体の重心が上半身に傾いて危うく池に落ちそうになった時
体を張って助けてくれたのも——アキだった。

「だから言っただろ？少しは言う事を聞けよ！！」

「そんなに怒んなよーアキ。お前の怒り方まじ怖えって」

その後は、優しくフォローをしてくれるタカにいの言葉に守られながらも

アキの力強い腕の中でひたすら泣いていたっけ。

——この頃は：思いもしなかったの。

お兄ちゃんのこの腕の中がどこよりも心地のいい私の居場所になるなんて。

大人になったアキの腕の中に愛しさを感じてしまうなんて。

愛するアキの腕の中を”誰にも渡したくない”と止めどなく溢れる愛に溺れ沈みそうになるなんて。

そんな日が、来るなんて——。

それは……私が小学生になる頃も何一つ変わらなかった。

中学生になっていたタカには、仕事人間だったお父さんの代わりになって

遠くも、包み込むような優しさで私を見守っていてくれて：

「アキーみゆと遊んでやれ」

アキは中学生を目前にしてもぶっきらぼうな物言いは全く変わらなくて。

「は？また俺かよ……、たまには兄貴行けよな」

：でも、なんだかんだ言って結局は相手をしてくれてたよね。

面倒くさそうに首を鳴らすアキに連れられて来た

ブランコとベンチだけが設置されている小さな公園

私がブランコを夢中で漕いでいても

アキはもう一つのブランコに腰掛けては、余りにつまらなそうな顔を
をしているものだから

どうしてもアキの機嫌を取りたくって：

『アキー！空がこんなに近いー！！』

ブランコが一番高い位置にいくと必ず空に手を仰いでこうアキに呼
び掛けると

いつも無愛想なアキがそんな私を見てちょっとだけ。微笑んでくれ
たよね？

「もっと近くに行きたいだろ？」

そして。みるみるうちに得意げな表情へと変わっていったアキは
重い腰を上げて私のお尻の両脇に足を置いて立ち漕ぎをしてくれた
から

一人で漕いだ時よりも空は数倍近く思えて：私は思わず大はしゃぎ。

でも、浮かれすぎて手摺りに捕まるのを忘れていた私は

アキの股をスルリとすり抜け、頭から真後ろに落下して怪我を負っ
たんだったよね。

病院で手当をしてもらっている時

責任を感じてかアキが泣きそうな顔をして見つめるから私は涙を必死に堪えていたっけ。

『大丈夫、痛くないよ?』

この時作った笑顔は、アキの目にちゃんと笑って映っていたのかな?

——この頃は：気づきもしなかったの。

「涙」って、痛みや悲しさを伝った切なさだけが流すものだと思っ
ていて

まだ沢山の涙の色があるってことに。

人を愛することで自然と溢れ出て来る
愛しいという感情が流す涙が存在することに。

アキと愛し合うことで、愛しさと切なさの色が複雑に絡み合っ
て流れる
名前のつけられない感情が涙を彩るようになるということに。

そんな日が、来ることに——。

そうだ：アキが日本を発つ前の最後のお誕生日

小学校になって初めての家庭科の授業で作ったフェルト素材のヌイ
グルミを手

アキの部屋に行った時のこと覚えてる?

『お誕生日おめでとーアキ♪』

この時の私にはこれ位しかできなかったけれど
気持ちがいっぱい喜んでもらえると信じて疑っていなくて
満面の笑みでアキにプレゼントを手渡したのに…

「何だよこのブツサイクなブタ！！
もっとマシなの持ってこいよ…」

しかめっ面にこの口の悪さ。

一生懸命アキのこと考えながら作ったのに。

しかも：それはクマなのに！！ヒドい、ヒドいよ…。

目に涙をいっぱい溜めて言葉も出せないでいた私に
アキは慌てもせずに取り繕おうとしてくれたよね。

「…よく見たら愛嬌のある顔してんな…」

そして相当面倒くさそうにしながらも
この部屋のどこからもよく見える本棚に飾ってくれていたから…

「特等席用意してやったぞ！」

本棚の最上階に腰掛ける行く宛の定まったクマのヌイグルミは
心なしか笑っているように見えて
目から零れ落ちる悲しみの雨は自然とお天気雨に変わっていく…

「だからほら、泣くなよみゆ…」

ゴネてる妹のただのご機嫌取りなんだろうけど
そんなぶっきらぼうなアキの優しさがたまらなく好きだった。

『うんっ。アキ大好きっ♪』

——この頃の私は：まだ知らなかったの。

「好き」の種類がまだこの他にもあって
大人になったアキが教えてくれたその抱えきれない「好き」を
「愛」と呼ぶのだということ。

その、アキへの「愛」がイケナイ「好き」の種類なのということ
を。

それでも止められなくてその禁じられた「愛」から離れられなくな
ることを。

そんな日が、来ることを——。

この 淡い色した思い出たちは
大切に失うことのできない 私たちのかけがえのない宝物

この 優しくも切ない 私の「妹」の記憶は
あなたの中で今 どの位美しく 輝いていますか？

そして 儚くも愛しい 私の「女」の記憶は

これから：　いつまで。あなたの前で輝き続けられますか――？

◎ Introduction

1st Secret Lovers:…*****

ねえ、アキ：——覚えてる？

「他人」として再会したあの場所

「他人」として交わしたキスの味

「兄妹」として重ねた 心の温かさと体の温もりを…。

私ね：あなたが傍にいてさえくれば

生まれた時から背負っていた「運命」だって乗り越えられるって

そう 思っていたの。

今でも 冷え切った心のどこかで 信じて 願っているんだろうな。

ねえ、アキ：——聞こえる？

とてつもない切なさに どれだけの涙を捧げても

あなたを想うヒトトキは かけがえのない愛しさで溢れるの

だからたとえ 一生赦されることのない罪を 一生背負っていくことになったとしても

心から こう思えるよ

あなたに出逢えて 本当によかった…。

あなたを愛したこと あなたに愛されたことは 極上の 幸せでした。――。

*****: My Secret Lovers

#1 愛しいヒト ―?―

side みゆ

厳しい夏の暑さが過ぎ去り、肌寒さが身に染み始めるこの季節
私こと、桜木^{さくらぎ} みゆ が迎えた25回目の秋。

冷やかな風に体は竦み露出した肌は震えて、誰もが寒さから身を守るけれど

私は今、それよりもっと大切な大切な守りたいものを抱えている。

あなたとの甘く、切ない：愛しい「秘密」のカンケイを――

「タカが副社長でアキは専務。この調子ならお父さんも安心して引退できそうね♪」

親子3人で囲む食卓に豪勢なおカズを並べるお母さんはいつになく
ルンルン。

我が桜木家の家族構成はというと：お父さんとお母さん
そして、お父さんが社長を務める大手化粧品会社で働く3人兄妹の
5人家族。

長男タカには去年無事、副社長就任を果たして
今年には一足遅れて次男アキがタカにいの専務の職を継ぐ。

ちなみに私は女性ってこともあって、去年までアキが主任を務めて
いた

出来て間もない企画開発部でのんびりとOL生活中。

「明日のセレモニーではアキが来期の事業方針をスピーチするのよ

ね？

準備の方はどうなの？」

そしてお母さんの言う”セレモニー”は毎年お父さんのお誕生日に開かれる

上位職の就任や年間の業績を発表するパーティーのこと。

「ああ：もう少しで終わる」

今年はアキの専務就任式がメインになるんだろうな、と横に座るアキを視界に入れると

やっぱり無意識に顔が火照ってしまう…。

その理由は：中学卒業と同時にロスへと留学したアキが去年13年振りに日本に帰国した日のこと、大人になったお兄ちゃんに会おう前に

出逢ってしまったの：大人の男の人の、アキに――。

時は2年前、残業で心身ともにボロボロになっていた帰宅途中場所は人通りの少なくなった新宿本社ビルの真ん前
きっかけは私の不注意でアキにぶつかってしまったことから。

でも私が必死に謝っていても、そこはさすがアキ。

怒りが沸々としてくる位素っ気ない対応を取った挙句に

思い切り私の存在をスルーして去っていくものだから、啞然呆然。

もちろん、もう13年も会ってなかったのもあって

その時はお互いが兄と妹だなんて全く気づかなかった：笑っちゃうよね。

でもね、次の瞬間きつと運命が私たち兄妹にちよつとしたイタズラをしたの。

私の元へと再び歩み寄る1歩1歩に掻き乱された鼓動

あの鋭い眼差しに見つめられる程に潤む瞳

気づいたら：あなたはまるで怪盗のように私の唇を奪っていた。この、恋心と伴に…。

どう考えたって初対面だと思っていた人同士がすることじゃないと今でも思う。

キスの理由なんて少しも分らない。受け入れてしまった事実があるだけで。

それでも、心も体も惹い寄せられてしまった：残酷な運命。

その出逢いから：あの禁断のフラグが立ったあの夜から

私の恋も愛も。アキに奪われて：——今も「禁断」に溺れている。

だからお母さんの前でアキとどう接したらいいのか分からなくて極度に意識してしまう

「みゆ……?」

私の名前を呼ぶ響きに心臓が慌て出して

「……醤油取れよ」

その抑揚のない命令口調に「醤油」とゆう

ただの単語にまでトキメいてしまうなんて……だいぶ重症。

でもここ最近、アキは会社から帰ると

明日のスピーチをまとめる為に部屋に籠もりつきり。

開発部の主任でもなくなってしまったから会社で顔を合わせることもなくて

夕食の時間が唯一アキをゆっくり見れる時間なのに
隠さなきゃイケナイって思う程意識しすぎちゃってドキドキが止まらない。

ポーカーフュイスを保てるアキが羨ましいよ…。

そうしてお箸を置く頃になると、アキはそそくさと部屋に戻って行き
テーブルに両肘をついたお母さんが満面の笑みを浮かべる。

「お父さんたらね？セレモニーの後は暫く家にいてくれるみたいなのよ」

そう。国外にも多くの支社を持つ会社の社長であるお父さんは
出張と題した海外赴任ばかりで小さい頃からあまり家にはいなかった。

その上、アキは留学してからずっと家を空けていたし
タカにいても数年前結婚して家を出て行ってしまったから
お母さんも寂しい思いを沢山していたんだろうな…。

ほころむ顔を隠すように手で頬を包むお母さん。
いくつになっても。大好きな人と一緒にいれることは幸せなことだよね…。

お父さんが帰って来るのは私ももちろん嬉しいけれど…

『お母さん。お風呂入って来ていーよー！洗いものは私がしておくから』

抱えた秘密の傷口が——チクチクと、痛む…。

「あらー？どんな風の吹き回しかしら」

後ろめたいことがあるから必要以上に労ってしまうなんて不純な親孝行…。

そんな自分に嫌気が差しながらお母さんの背中を見送ってお皿に手を掛けようとすると

後ろから一瞬にして私の心を捉える、少し掠れた声が…舞う…

「みーゆ——…」

肩に寄せられた顎から、体中に甘い振動を。私の名前を。響かせて…お皿に向かうはずだった私の手に指を絡ませながら甘い禁断への誘惑を囁くのは…

「夜中…部屋に来いよ」

会社では上司、家ではお兄ちゃん。そして、2人の時は…

「——返事は？」

『う…うん——』

愛しい、私の——恋人。

物音一つしない真夜中の廊下で微かに耳を掠める、パジャマの裾が床板に擦れる音
罪悪感で痛む胸をキュッと手で摘みながらお母さんの寝室を通り過ぎて

辿り着く…アキ部屋。

後に扉を開いて目に入るのは、机に体重を預けてパソコンと向き合うアキの後ろ姿

「……随分と早いな」

相変わらずの素っ気ないお言葉に眼鏡の奥から突き刺すように放たれた冷たく鋭い視線
仕事モードのアキは、一瞬にして体温が下がってしまう程に…怖いっ。

…なのに。家で仕事をしている時にしか見れない
眼鏡越しの瞳に見つめられると何故か胸が熱さに締め付けられていく…。

カタカタとキーボードが鳴らす音に紛れる高速で打ち続ける私の鼓動の音色

それは恋人に与えられた愛しい音色

最近2人の時間が持てない上に手を触れ合うことにさえ気を使っていたから
少しでもアキに触りたくて肩に手を掛けるけど…

「邪魔すんな。」

思わず涙目になってしまいう位冷たいっ……。

邪険にする位なら期待させるような誘い方しないで欲しかったよ……！！

そうしょんぼりしながら沈んだ心を抱えてベッドの真ん中にちょこんと座り

寂しさを紛らわす為に大きめのクッションを胸に抱えた。

でも本当はね……どんなに冷たくされてもアキと2人きりの空間が嬉しくてたまらない。

私たちに与えられたほんの、僅かな——恋人同士のヒトトキ……。

アキのサラサラした漆黒の髪が微かに乱れるだけで鼓動の音色が甘くなっているから

その音が届かないようにクッションをグッと胸に押さえつけて、アキの鋭く冷めた眼差しが微かに私を捉えるだけで頬の温度が熱を上げていくから

この火照りが悟られないようにクッションに顔を埋めたりする。

何で……こんなに。好きなんだろう——。

「……そんな物欲しそうな瞳で見つめてんな。集中出来ないだろ……」

でも、アキから漏れたのは呆れ声に大きなため息一つ。

常に沈着冷静を崩さない所も、この冷ややかな物言いも、

昔から……全っ然変わらない。

それから、アキは変わらず仕事に没頭し続けているから
私がい描いていた甘い時間はここにはない。

アキのたった一言の誘惑で募った欲望が膨れ上がってしまった
なんて

まるで餌を待ちわびてた犬みたい…。

ここでしっぽを振って待ち続ける自分が情けなくなってくるから
少し時間を置いてまた来ようとベッドから降りて立ち上がると
パソコンの画面と向き合ったままのアキの手が咄嗟に私の手首を捕
まえる。

「終わったら好きなだけ相手してやるから……そこにいろ」

えっ。相手：してくれるの…？

けれどこんな思わせぶりな言葉にまるで呪文をかけられたみたいに
体は従順に反応して

ちんまりとベッドにお座りをした。

早く、仕事終わらないかな？早く。相手して欲しいな：

私にしっぽがあったらきつと今フル回転だろうな……いつもそう。

アキの言葉一つに心は躍らされて、ほのめかされた期待に瞳が勝手に
潤んでしまう。

この「マテ」状態さえ幸せな時間に変わっていくから情けない自分
だって、愛しい…。

「全く：犬みたいな奴だな…」

…や、やっぱり？

そして「オアズケ」の時間をアキの匂いに包まれたベッドでゴロゴロと過ごしていると
やがて柔らかなベッドが沈み、耳の後ろから揉み込むように頭を撫でる大きな手の先には
アキの柔らかな微笑が零れていた。

『…終わった、の?』

ベッドの縁に座ったアキが寝転がる私に甘い誘惑の手を差し伸べて：

「”ご褒美”やるから…」

合わさった手をもの凄い力強さで引き寄せられて：

「…——来いよ」

ココロも、カラダも。一気に、アキの鼓動に。包まれる——

腰にしっかりと回された腕に隙間がない位抱きしめられて重なり合
い、混ざり合う：鼓動
逞しい2本指が私の顎を強引に持ち上げて見つめ合う：瞳

アキは顔を斜めに傾けるときつと。そのイジワルな唇を

「口：開けよみゆ…」

…：震わせるの——

アキの唇まで、あと——5センチ足らず。

『それ：恥ずかしい…っ』

眼鏡の奥の挑発的な眼差しが羞恥心を煽り続けるから火照った顔を背けようとするけど

顎を捉える力強い指先がそれさえも許してくれなくてこの恥ずかしさからの逃げ道は全て封鎖されてしまう。

「……知ってる」

確かこれは”ご褒美”のはずなのに私が辱められているのは……なぜなの？

久しぶりのキスでもアキの意地悪さは、容赦：ない。

冷静な目で私を見下ろす仕草に悔しささえ感じるけれどすぐ目の前にある”ご褒美”が欲しくて、たまらなくて甘い欲望に囚われた口はアキの思惑通りに開かされていく。

近づく距離、微かに触れ合う上唇

開いた口の隙間に吹き込まれる熱い吐息

「…：久しぶりで忘れたのか？——”もっ”と”だろ？”」

…：そして。”開き足りない”と言わんばかりに私の唇を上下に押し開いたその。強引な唇で…

『……っ。んふ、んッ——…：』

私の心ごと。唇を奪い尽くす——

：それは、呼吸も満足にさせてもらえない私をまるごと食べちゃうようなキス。

力強い鋭さで私の中をかき乱す熱い舌先に欲望は暴かれて唇を潤わしていく魅惑の甘い蜜に底なしに溺れさせられる。

有無を言わさない強引さから

いつもの冷たさの中に秘めた火傷してしまう位の情熱からアキの愛がそのまま伝わってくるから

こんな意地悪なキスも本当はたまらなく、好き…。

けれど、そんな意識のトロけそうなキスに夢中にされている最中にもパジャマの中に滑り込んでくる：大きな手、思わず離れた唇と唇

『ま、待って…』

私だって、ちょっとは。期待しちゃってたけど：

二つ隣にある寝室にはお母さんが眠っているのだからここでこれ以上はやっぱりまずいのでは：なんて

オロオロとしている私を見て微笑を零すアキが響かせるのは…

「今：——抱きたい」

——極上の。甘い禁忌への誘惑

私たちに芽生え抱き続けている感情は——イケナイ愛情愛するがゆえにグラグラと揺らめく——イケナイ欲望

『でも：お母さんが：』

目の前で私の心を射抜くのは獲物を狙う野獣の光る瞳。

お母さんの前では決して崩さない「お兄ちゃん」の姿なんてどこにもない。

こんな風に「女」を求められたら

イケナイと解っていても今ここで抱かれなくなっっちゃうよ：

…：いつだって、そう。アキの「男」が私の「女」を刺激する

”ご褒美”欲しいんだろ、素直になれよ」

アキは悪戯な笑みを浮かべながら私の視界から外れていくと急に耳たぶに歯を立てて甘噛みするものだから肩がピクリと反応してしまっ

「相変わらず弱いな：ココ。」

私が耳にかかる吐息に体中がゾクツと震え上がっている間にも耳を鳴らすのは

アキの指先がパジャマのボタンを外していく鈍い音

——どうして、人は羞恥心を学んでしまったんだろう。

いつも隠されているものがアキの男の目に晒されることへの

上昇気流に乗った居たたまれない気持ちから

器用にボタンを外していくアキの指に思わず手を添えていた。

これが初めてってワケでもないのに毎回、この瞬間が恥ずかしくてたまらない。

けれど、耳を撫でる濡れた唇から放たれるクラクラする程の熱い吐息は……やがて

理性さえ翻弄させる悪魔の囁きに、変わる――

「もっと奥まで見せて……みゆ」

この甘い声にそそのかされていとも簡単に崩される小さな抵抗

私の浅はかな考えを知り尽くしていて

私の全ての感覚を支配しているアキにはいつも、いつも。適わない……。

満足げな表情で軽くキスをして首筋から下りゆく、アキの唇。

はだけた胸に幾つもの刻印を押しつけていくその唇で

「愛してる……」。

愛を、散りばめていくから……

両手でアキの頭をギュッと抱き抱えてさらりとした髪に頬を寄せた

胸が締め付けられるの。――抱え切れない、愛しさで……

前ボタンが全開のままブラを左手でグッと持ち上げられて露わになる胸の膨らみ

ズボンから迷わず滑り込む右手はショーツの中

パジャマを半分脱がされたままの状態で押し倒されたフカフカのベッド

胸の先っぽを押し上げて：包み込んで

時にはチュッと短い音を響かせて吸い上げながら弄ぶ：悪戯好きな舌先と唇

欲望が疼く”なか”を：開いては閉じる2本の指でかき回しては溢れる蜜にわざと音をつける：巧みで、イジワルな指先

ピンク色した蕾を撫でるように優しく擦る：優しい指の腹

『や：いっぺんにされたら：、ふっあ：あッ——：』

「そんなに激しくてないだろ？」

確かに刺激はそう強くないはずなのに

アキがジラしながら執拗に攻め続けるから声だって漏れてしまう…。

「あんま吠えんな：母さんに聞かせたいのか？」

そんなこと言われたって。

アキに触れると気持ちよくて、アキが触っていると思うだけで感じるカラダ

「敏感過ぎるのも考えもんだな：」

フツと笑みを落とすアキの首に両腕を巻き付けてキュツとしがみつくと

それに応えるようにアキはギュツと抱きしめてくれた。

素肌で抱き合っているだけでこんなにも。気持ちいい……。

『だって…アキに愛されてるだけで感じちゃう…』

カラダで感じる快感とココロで感じる愛はセツトだもん——。

「…煽り上手も考えもんだな」

『ん？どうゆう意味…っん——』

力強い唇に塞がれて…アキの中に漏れる…刺激に溺れた、甘い鳴き声

カラダは快感に堕ちゆく悦びに。

ココロは愛に満たされる悦びに。包まれて…

アキの前だけで。私は、「女」になる——。

昔、アキのお誕生日にあげたクマのヌイグルミは

この、変わり果てた私たちを見下ろし続けているけど

どんなに後ろめたくても、どんなに罪悪感が胸を痛めても

アキへの愛が膨れ上がる程罪の意識から遠ざかっていくの…

あなたが傍にいてくれるだけで、あなたの愛が感じれるだけで私、
幸せだから…。

この手を永遠に……放さないで。

「他人」として交わしたアキとの初めてのキスは…甘く、甘い。蜜
の味がする

「禁断の果实」

魅惑的な匂いで惑わす決して食べてはイケナイ果实に誘われて
禁断の恋の味を知り禁忌を犯してしまった私たちに与えられた知識は

「イケナイ欲望」

許されなくたっていい。世間から追放されたって構わない。
これが、私たちの選んだアダムとイヴの関係

—— 秘蜜の、恋人 ——

#2 愛しいヒト ―?―

side アキ

風が窓をガタガタと鳴らす音に耳が微かに反応し意識がうつすらと色づき始めると

薄目に見える視界がぼんやりと映し出すのは

俺の腕に頭を預けて眠るみゆのあどけない寝顔

抱かれた後、みゆは決まって素肌を擦り寄せいつも以上の甘えを見せてくる。

そんな愛らしい素振りを目の当たりにすると

禁忌を犯した罪が洗い流されていく錯覚に陥り

この甘い体温と肌の柔らかさを素肌で感じ取る度に固い決意が胸をよぎるんだ

それがどんな重い罪だろうが、絶対に。手放さない…。

みゆの柔らかな髪を撫でながら見渡す俺の部屋

すると、みゆがクマだと言い張っていた縫いぐるみと目が合う。

「アキ大好きっ」

ロスへ留学してから13年振りに再会するまでは

あの時のみゆの無邪気な笑顔が俺にとっては唯一の、大切な「妹」の記憶だった。

それが：「好き」の意味さえ俺が変えてしまったんだよな：何度か、後悔はした。

だが、それ以上に失くしたくないものが……ここに、ある。

『みゆ？起きろ…』

窓の外がまだ薄暗い事にホッと胸をなで下ろし、柔らかな頬を指で摘むが：

「んー…いやあ：アキい——」

どんな夢見てんだよ…。

つねる指に更に力を加えると

みゆのまつげは微妙に揺れ動き大きな瞳が少しずつ開いていく。

『寝言でアニキの名前呼ぶなんておかしいだろ…？』

そして俺を瞳に映すと気持ちよさそうに目を細め
浮かび上がる…穏やかな笑み

「…おはよ。」

『母さんが起きる前に部屋に戻れよ』

「んーもーちよっとだけ。」

俺の体にしがみつき頬を擦り寄せじやれる姿も。

たまに俺を見ては幸せそうに微笑む仕草も。狂おしい程に、愛しい
——。

：——その時、廊下を歩く足音が耳を捉え、反射的にみゆの体を胸
に押し込み

程なくしてドアノック音が鳴ったその後に響く…：母さんの声

「アキー起きてるかしら？」

肌に纏うもの無く体を寄せ合う兄と妹：「男」と「女」の事情
今扉を開けられようものなら一溜まりも無いと

一瞬にして夢から現実に戻された感覚に頭は冴え渡り
みゆの大きな胸の鼓動が体中に響き渡る。

「お父さんを空港まで迎えに先に出るわねー？」

みゆにも伝えてくれるかしら」

しかしながら、ドア一枚を隔てて響く母さんの慌てた声に焦り口調
から

急いでいる事を察すると自然と心を広く持て
ドアノブを捻らせない為に必要以上に声を張り上げていた。

『ああ：分かったよ』

……そう、運よく。背徳へと続く扉は開かれる事は無かった。

油断の出来ぬ状況に潜め続ける息、やがて鳴る玄関扉の閉まる音：
施錠の音

それと共に二人の大きな吐息が漏れていき

再び手に力を込め抱きしめたみゆはカタカタと唇を震わせていた。

「心臓：止まるかと思ったあ……」

何やってんだろうな、俺は……。本当は、この家で抱くつもりは無かった。

少しでもリスクを侵したく無かったんだ、今を保つ為には――。

「ね：まだお部屋借りないの？」

確かに俺は家族を捨ててでもこの関係を貫く覚悟が既に出来ている。みゆもそれなりの覚悟をしているに違いなかった。

だが、その時が来たならば恐らくみゆはこうして怯えるのだろう家族を捨てる事に：戸惑うのだろう。

『今日のセレモニーを終えたら部屋を決ようと思ってたんだ。

もう目星はつけてあるから週末にでも見に行くか？』

それ故に、その選択はなるべく避けてやりたいと俺は思っている。この秘密の関係を表に出す必要性が生じる、その日まで：――

「久しぶりのデート？行くっ♪」

『ここだと可愛い鳴き声も聞けないしな…』

「アキって：えっちだよね…」

そう言って顔を赤らめるみゆが無性に艶っぽく見えたと同時に思う事。

大人になったみゆと再会した日から比べて随分女らしい表情をする様になった。

普段の甘えたな可愛さとは違う、この愛らしささえも

みゆのするどんな表情もどんな仕草も。俺にとってはその全てが――媚薬になる。

母さんのいない朝の食卓

用意の遅いみゆを気に掛けながら朝食を摂っていると、廊下から響くみゆの弾けた声

「あれー？タカにいい！！どうしたの？こんな朝から」

どうやら、大手取引先の令嬢と政略結婚を果たし実家を出た俺の三つ上の兄貴がやって来た様子。そしてその後ろから顔を出すのは…

「アキくんお早う♪」

年上の俺を何故か君付けで呼ぶ

一度しか会った事の無い兄貴の奥さん、紗英^{さえ}さんだった。

今年のセレモニーには家族揃って出席するが、何故家まで来る…？

久し振りに揃う兄妹

そして”桜木”の一員となった紗英さんは早速みゆに絡み出す。

「みゆちゃんそのスーツでセレモニー出るの？」

社長令嬢なんだしもう少しお洒落してもいいと思うよ？

実はみゆちゃんに似合いそうなワンピース持って来たの！」

そんなに親しくもない筈だが、歳が近いせいかやけにみゆになつきそれに圧倒されたみゆは紗英さんに手を引かれて着替えに向かった。

すると居間には自然と静けさが戻り、流れ始める兄弟の微妙な空気

『こんな朝っぱらから何しに来たんだよ…』

「相変わらず冷てえ弟だなあおい：お前らの事が心配でなあ。
まさかとは思うが家で も みゆに手出してねえだろうなあ？」

既に襲った事知ったら殴りかかりそうな勢いだな：。

兄貴は俺とみゆの係を知る唯一の家族。

少し距離を置いた所から俺達を見守り、時には手助けをしてくれる
頼もしい兄貴。

妹をこよなく可愛がるが故に顔を合わす度に聞くこの台詞は多少、
鬱陶しいが

俺達の係を黙認してくれている兄貴には本当に感謝しているんだ。

「そう言えばだな？みゆの企画開発部に来る主任

2年前までアキの居たロス支社にいた奴らしいぞー？

仕事のデキる奴らしくってなあゝ顔見知りかもしれないぞ」

『へーえ：』

大して気にかけてもいなかった

まさかアイツだとは思ひもなかったんだ。

それ故に兄貴の話を適当に流していると

遠くから聞こえる紗英さんの声が何故か俺に絡む。

「アキくーん！！ちょっと来てー」

俺一人を呼ぶ事に疑問を持ちつつ煙草を吹かす兄貴を背に声のする
脱衣場へ向かうと

紗英さんの満面の笑みが出迎え

「どう？アキくん。みゆちゃん色っぽいでしょ♪」

脱衣場の奥を覗き込むと、さっきのスーツ姿とは見違える程のみゆの服装。

クリーム色のタイトなワンピース

丸く大きく開けた胸元

際どいラインまで入ったスカートのスリット

無言で冷ややかな視線を浴びせている俺に、みゆは瞳を惑わせた。

「紗英さん、この服やっぱり私には…」

「大丈夫♪ストールもあるし！車にあるから持って来るわね！！」

鼻歌混じりに立ち去る紗英さんとは反対に沈んでいくみゆの表情
俯き加減で見つめながら何を言い出すかと思えば…

「胸の谷間：もっと作った方がいいかな？」

みゆの発言はたまに予想圏外をついてくる。

『寄せて上げてもたかが知れてるだろ』

「アキ好きだと思ったのに…。色気の欠片もない私にはどーせ似合わないもん」

『見るのが俺だけならいいけどな…そんなに女に見られたいのか？』

頬を膨らませ作るむくれた表情はまるで駄々をこねる子供の様だが
俺が愛を与えた分だけ、頬を赤らめ：瞳を潤わせ「女」になっていくんだ。

「アキには…見られたい——」

俺の手で「女」にしていると思うと優越感で満たされる
だが、その姿を他の男の目に晒したくはない。
ジレンマってやつなんだろうな…

『あんま色気付くなよ…』

大きく開いたみゆの柔らかな胸元に顔を埋め強く、強く。唇を押し
つけ

その真っ白な肌に刻印を残す。

「えっ！？待っ、て…」

『……暴れんな』

俺のものだと言う印を——。

『ソレが見えない様に上に何か羽織ってろ』

こんなに女を縛り付けておきたいと思ったのは生まれて初めてだ
特にみゆの性格上隙が多くあり更には男へのガードが甘過ぎる
俺にしたら…心配で——仕方ない。

「おーい。イチャこいてんじゃねえぞ？」

アキに紹介する奴がいるから朝っぱらからわざわざ来たんだ。

二人共用意済ませて表へ出ろ」

煙草の白い煙をモクモクと立たせながら冷ややかに俺達を見守る兄貴その目を潜り抜けみゆと玄関へと移動すると、兄貴に紹介されたのは門の向こう側で深く会釈をする見るからに若い青年だった。

「専務、お迎えにありがとうございました。」

本日より運転手を務めさせて頂く安東あんどう 健たけるです。

今朝はみゆお嬢様もご一緒にお送りする様副社長に言われておりますので」

『…ああ。宜しく頼むよ』

大手企業・社長の一人娘

言われてみればみゆは社長令嬢なんだよな…。

そうしてセレモニー会場のホテルへと向かう車内
安東は物珍しそうにバックミラー越しにみゆを眺め気さくな口を開く。

「社長令嬢とお聞きしていたのもっとツンケンした方だと思っていました。」

素朴な方でよかったですよ」

「…んと、”お嬢様”は恥ずかしいので普通に呼んで欲しい、です…」

社長令嬢にしたらみゆは素朴なんてもんじゃない。……普通過ぎるんだ。

そう言えば、”みゆにはなるべく普通の暮らしをさせてやりたい”
父さんは昔からそう言っていた。

会社を担うのは男である兄貴と俺、そしてみゆには
会社の繋がりとは別の所で女の幸せを掴んで欲しいと口を酸っぱく

言っていたそうだ。

女の幸せ：ね……

みゆの右手の薬指に目をやると

今日も欠かさず身につけられている、先月の誕生日に俺が贈ったプレゼント

その比較的シンプルな指輪には眩しい程に輝き続ける1カラットのダイヤモンド。

この指輪に込めた想いを告げれるのは、一体いつになるんだろうな……。

「車で送り迎えなんて急にセレブになった気分ー♪」

だが、この関係が世間から許されぬ秘密の関係であっても

こんな無邪気な笑顔をこの近い距離で見続ける事が出来るのならば

今は、それだけで。いい――

某有名ホテルの大広間で行われる、年1度のセレモニー

その会場には同業者、関連企業の重役達が既に300人程集まっていた。

社長である父さんの周りには会長・社長クラスの人が群がり

副社長の兄貴は父さんのサポートで挨拶回りにてんてこ舞いだ。

公の場に不慣れなみゆを一人残す事が心残りだったが

俺は専務就任の挨拶、後に来期企業方針のスピーチを着々とこなし式典プログラムを全て終え専務の初仕事である挨拶回りをしていて俺を呼び止める聞き慣れた声に足が止まる。

「——久しいな、アキ」

その声の主は、ロス支社を同期入社した柚城ゆずぎ 隆りゅうだった。

『何だ？ 本社のリサーチにでも来たのか？』

ロス支社では数多くの仕事を共に手掛けたビジネスパートナー。仕事に対する熱意は変わらないが根本的なやり方が違うが為に反発し合う事が多かったのも事実

だが、決して仲が悪い訳では無くプライベートでも仕事の延長上で飲みに行く様な仲でもあった。

「明日から本社勤務なんだわ俺。それよりアキの妹来てねーの？」

…は？ 兄貴の事はともかく隆にみゆの話をした記憶は無い。

『いても誰が教えるかよ…』

そう怪しげな眼差しを送ると隆は軽く鼻で笑う。

「上司になる身としてはチェックは欠かせねーの。

そもそもアキの妹になんか興味ねーよ。

お前の妹つつたらどーせやたら高飛車な女なんだろう？

高い鼻へし折ってやんよ俺が」

そうか：朝兄貴の言っていた俺の後を継ぐ開発部の新主任は隆だったのか：

言い寄って来る女が山ほどいる割には女に依存しない隆の事だ
ましてや部下に手を出す様な男じゃない。そんな事はさほど気に留めてはいなかった

だが、仕事には誰よりも厳しく

実績を残す為ならどんな手を使ってでも必ずや成し遂げる奴なんだ
その隆の下で働くみゆが無茶をさせられるのではないかとそれだけが心配だった。

——まだ、この時は……。

その後二言三言交わして隆は立ち去り、挨拶回りも一段落を迎え
広い会場を見渡してみゆの姿を探していた時だった。

ガシャン：とグラスが合わさる音に耳を奪われ反射的に目を向けると
ドリンクを持って回るウェ이터の背中に頭を突っ込んでいるみゆ
がいたりする。

全く、どこでもぶつかる奴だな：

思えばあの不注意さがなければあの夜女のみゆと出逢っていなかった
たんだろうな：

そう思うと自然と笑みが零れ、胸には止めどない愛しさが満ち溢れ
会場から出て行くみゆへと足が向いていたが

みゆへの道のりを阻む俺へと突き刺された視線の元を辿った先には

ビー玉の様な丸く大きな瞳

背丈は低いがいるだけで華やかさを放つ女の姿

そして俺の目の前に来ては造り物の様なまんまるい瞳を何度も瞬きさせ

童顔を携えた女は悪戯にクスクスと笑い出した。

『……何か?』

「先程スピーチされていた専務さんですよね?

人と話してる所を見てても顔色一つ変えなかったのに
優しく微笑んだりもするんだなーって」

突然何を言い出すのかと不機嫌な顔を見ると、更には声を出して笑い出す。

初対面でどこまでも失礼な女だと不快感さえ覚えたが
そのこじんまりとした身なりからか、このあどけない笑顔からか
名前も知らない目の前の女が何故か幼い頃のみゆの面影と重なって
いた。

「妹」の、みゆと――。

みゆがアイツとの衝撃的な出会いをしていた頃
俺もまた、”桜木”と言う名の新たな家族のシガラミとの出会いを
果たしていた

――極上の禁忌へと導く出会いを。

会社も家族さえも敵に回しお前を奪う心構えでいた俺には

秘密の関係を壊す事はいつでも出来たんだ。

だがな、お前を傷つけるであろう真相を明かす事を最後の最後まで、俺は躊躇った。

みゆを失くす事になる位ならばいつそのこと、この時に、壊しておけばよかったんだ――

#3 兄妹のキョリ ―?―

side みゆ

人混み溢れるセレモニー会場

ただの平社員の私には知り合いなんているワケもない。

その心細さに耐えられずロビーへの重い扉を押すと

後ろの人に押し出されて前へと突き飛ばされてしまう私。

高級絨毯に立て膝について心細さ、倍増…。

「うっわ。ひでー転び方!!」

そして手を貸してもくれず

ただ私を見下ろすだけの男の人に見られて羞恥心がプラスされる。

少しウネった長めの髪

細くなく体育会系の体型でもなく程良い体つき

見つめられただけで飲み込まれそうな程の大きめの瞳

「――名前は？」

ポカンと見上げて絨毯に座り込んでいる私に声だけを放つ冷たい人

『……桜木 みゆです』

「桜木”ねーへー：ほー！。」

ライトブルーのネクタイを一旦緩めた後、ガツと一気に外す仕草は
とても豪快

「セレモニ―つまなくなね？出ようぜ？」

これはもしや新手のナンパ？

『もうすぐアキ：兄が迎えに来るので…』

”兄”と口に出すだけでアキとの距離を感じてしまっただけで寂しさを顔に滲ませていると

彼は腰を屈めて私の胸元に一本指を差し込み、生地を思い切り前へと引っ張られて

『えっちょ…っ！！』

余りの大胆不敵行動で拒む隙なんてなかったものだから慌てて胸元を手で隠すけれど、そんな私を見て彼はニヤリと笑みを浮かべた。

「顔真っ赤！恥ずかしいんだ？フゝン。キスマーク丸見え。すげーエロい」

そんなあなたがえろいです…っ。

「谷間にキスマークって色気あんな。よし。アキなんか放つという出るぞ——みゆ」

この人、馴れ馴れしすぎるっ…。って、あれ：今”アキ”って——？

そして人の言うことを少しも聞こうともしない

自己中心的な強引さに呆然として座り込んだままだいると

「トロい女…」

そう大きなため息をつきながら私の腕を鷲掴みにした。この出会いは：

偶然 or 必然——？

そうして：アキを”アキ”と呼ぶことに安心していたのか、腕を捕まれていても抵抗せずホテルの近くにあるカフェまで着いてきてしまったけれど今更ながら自己嫌悪。

初対面の男の人にホイホイ着いて行くなんてきつと幼稚園児でもない。

「しかしアキとは似ても似つかねーな。高飛車のカケラもねー！ビクビクしてて小動物みてー！！」

ちなみに彼はと言うと、窓際の席に腰掛けるなり体を仰け反らせて更には高笑いをする始末で：その態度は——LLサイズ。

『アキとはお知り合いなんですよね？』

「知り合いなんてもんじゃねーよ？やたらお知り合い」

言い直す程のことかな…。

『あのー：ところでどちら様ですか？』

「今更聞くなって！！」

だって聞く暇もなく連れてこられちゃったんだもん。

「明日付けで企画開発部・主任に就任する柚城 隆。宜しくな、桜木”」

えっ…新主任だったの——！？この人が私の直属の上司！？

主任は主任でもアキとは全く違うタイプ…

言葉では一括りにできる強引さも、自信に満ちた姿勢もどこかが…ううん、まるで違う。

「アキとはロスで入社当時のダチなんだわ。

アキの妹は俺の妹みたいなもんって事」

その人類皆兄弟的な発想どうかと思う…なんて心の中で突っ込みを入れてみると

程なくして、ウェイトレスさんが注文を取りに来ると予想外な単語が出てきたりする

「俺フレッシユキウイジュース」

似合わない物を自信満々で注文する柚城主任

…どうしよう。何かこの人…突っ込み所、満載。

だから笑ってしまいそうになるのを必死で堪えていると携帯のバイブがポーチを揺らす。

背面ディスプレイには愛しい”アキ”の表示

パカッと携帯を開いて嬉しさを乗せた指で通話ボタンを押すけれど…

『もしもしアキ——：』

アキの声を聞く間もなく携帯をサッと取り上げられてしまう。

「みゆは俺が保護してやったから心配すんなアキ。頑張れよ」専務
「！」

：——カチッ。

滅多に掛けてくれないアキからの貴重な電話だったのに勝手に切っちゃうなんて：。

そう恨みを込めてキウイの粒々食感を味わう為の太いストローをくわえた柚城主任に

ムスツとした表情を向けてみるけど

彼がジュースをゾーゾーと啜る音に悔しくも腹立たしさがかき消されていく。

「アキの妹にしちゃたら平凡な女だな：

しかも女にはアラスカ並に冷たい奴が妹の心配する”あにき”？

どっちも想定範囲外で桜木家ツボつきまくり！！」

はあ：彼のそんな独り言を聞いているとどうしても考えてしまう。

高学歴、出世街道まっしぐらのアキは

顔だって街ゆく女の人が振り返る程にカッコイイ。

それに比べて私は社長令嬢ではあるけど

その肩書きに名前負けしてしまうどこにでもいそうな普通のOL。

それは兄妹以前の問題であって：女として、男のアキと釣り合っていない。

それでもどうにもできないことにしょんぼりしていると
柚城主任の独り言に終止符が打たれた。

「なーそろそろソノ胸隠したら？ジュース飲んでつとどーしても
目がいくんだけど」

言われて思い出す大きく開けた襟口の大胆さに
慌てて肩からずり落ちたストールを巻き付けるけれど

そう言えばさっき胸の谷間所かキスマークも見られちゃったんだよね…。

なんて回想していたら恥ずかしさがみるみる甦って目に涙を滲ませ
ていると

柚城主任はフツと鼻を鳴らし笑いを吐き出した。

「アキも隠したくなる訳だわな：お前…：やたら可愛い。」

そのまともや意外なセリフに戸惑っては、それに被せられたこの眩
きに…

「——俺のモンにしたくなる位」

胸は強く打たれ、頬の温度が急上昇していく…

——その後、柚城主任は何もなかったようにホテルの入り口まで送
ってくれた。

最初は自分勝手に強引で更にはえっちな人って印象しかなかったけれど

意外に可愛い所があったり、人をドキドキさせる言葉を急に言ったり…

本当、掴み所の、ない人：――。

セレモニー当日は平日だろうと会社は公休日になる

柚城主任の気まぐれな”お茶”に付き合わされてもまだお昼過ぎ。

戻った所で私の居場所なんてないけれど

仕方なくわんさか人のいる表扉を避けて会場の裏口扉に向かい

会場への扉に手を伸ばすと後ろから響く…不機嫌な声色

「何ノコノコと着いて行ってたんだよ…」

疲れた表情にため息を被せて私より先にアキが大きな扉に手を掛ける。

会場の中から漏れる眩しすぎる光

表扉と違い落とされた照明が隠す恋人たちの表情

『だってあの人すごく強引で…』

そう言い訳を並べようとする

道德に繋がる扉のその裏側でアキはそっと、軽く。キスをした

「：——俺より？」

大胆不敵とはまさにこのこと。

こんな公共の場で誰が見てるかも分からないのに、さり気なく奪う不意打ちのキスでも、こんなアキの強引が一番——：私をドキドキさせる。

開かれた扉の向こうに待つ「兄妹の距離」

扉の裏側で密やかに確かめ合う「恋人の距離」

兄妹——恋人 道徳——背徳

「相手が隆だからよかったが：：：気をつけろよ？ お前男に隙見せ過ぎ」

いつもならあり得ない位嫉妬するのに今回は意外にもアツサリとしたものだった

柚城主任がそんなに信用のある男の人には思えなかったけど：：そこには強い友情があるのかな？

「……隆と、何かあったのか？」

『：うん？ なんにもないよ？』

「お前は俺だけを見てればいい」

そうして私は、ゾクゾクする程の独占欲とガチガチに固められる支配欲に

きつく、きつく：縛られて。

『うんっ：。』

胸の鼓動は、アキの虜になる――。

大したことじゃないからあえて言わないことってあると思う。

”口には出さないこと”それを「嘘」とは呼ばない。

けれど、それが募ってゆけば、やがて：――嘘ニナル。

――明くる日。アキは早朝出てしまったから私は地道に電車通勤

手すりに掛かった右薬指には、今日も輝きを忘れない指輪を彩るダイヤモンドは

会社にもしていけるようにと先月のお誕生日に

アキがプレゼントしてくれたシンプルなデザインの指輪。

ブリリアンカット ダイヤモンドが中央のお花に包まれている
アキから貰ったもう一つのデザインリングは休日用。

この指輪たちと同じようにアキへの愛も毎日キラキラと輝き続けていた――

――朝のオフィス。開発部12人が揃い早速新主任の紹介が始まる。

思い出すなあ：去年アキが紹介された時を…。

初対面でキスしちゃった男の人が次の日には主任としてあそこに立

っ
て
い
て

そしてそれはお兄ちゃんだった：あの時は相当驚いたっけ。

「新主任チヨイケメン！！アタックしちゃおっかなあ♪」

なんて思い出に浸っている私の横で黄色い声を上げているのは
年甲斐もなくブリッコキヤラを通すイケメンに目がない木村きむら 絵里花えりか

「アンタには沢田がいるでしょーが。」

そして恋愛体質の絵里花にすかさずツツコミを入れるのが
年の割に色気を纏ったお姉キヤラの岩崎いわさき 奈緒なお

「やっぱあゝ年下ってえゝ考えがガキなんだよねえ：」

そして絵里花の魔性にハマった1つ年下の沢田さわだ 亮介君は
向こうのデスクで片肘をつきため息を漏らしていた。

絵里花が彼女じゃ沢田君も大変だろうな：。

絵里花と奈緒は私と同期。アキと私の秘密の関係も知っている大切
な：友達。

「あたしもオッサン狙おうかなあ。

でも奈緒のカレみたいな会えないオッサンはイヤーあ！」

「アンタ私に喧嘩売ってんの？」

ところで、絵里花の言う”会えない”には深い意味が込められてい
たりする。

そう、奈緒もまた私とは違った秘密の関係を抱えていた

「不倫」という名の許されぬ関係を：。その相手は——タカにい

「桜木く主任室に来ーい」

やがて挨拶を終えた柚城新主任に早速呼びつけられる私…。

約1年使用主のいなかった主任室で

アキの座っていた椅子に態度でかく腰掛けるのは

アキとはまた違った存在感を漂わせる柚城主任

「…それで現在の進行状況は？トラブル抱えてんだろー？」

仕事の話になると目の色が変わる所はアキと一緒に。

『ボトルとフレグランスのサンプルは既にあがっているのですが
パッケージのゴーサインだけが出ないんです…。

原案を何度提示しても予算オーバーだから練り直してまた来いと
言われて…』

去年クリスマス用に発売した私が企画したフレグランス―Blin
d Love >溺愛<―

このシリーズ化が決定し、間近に迫った今年のクリスマスにも発売
される。

「このままじゃ発売に間に合わないな…。」

―Eternal Love >永遠の愛<―”その愛がこの香りと共に永遠に生き続けますように”
これが今回のコンセプト。

”永遠の愛を誓う”という意味が込められている
フィリピンの国花”サンパギータ”をモチーフにした
爽やかさに甘さを加えたジャスミンの香り放つフレグランス

『部長が中々首を縦に振ってくれなくて…』

…そう。アキが私に永遠を誓ってくれた

もう一つの指輪にデザインされたお花がサンパギータ

アキのことを想って企画したものだから、何としても成功させたい
…。

「そいつどんな奴？」

『部長ですか…？』

いつもニコニコされていて企画内容もとても親身に聞いてくれて
…』

それでも、毎回企画書を笑顔で突き返されてしまう。

「はいはい。エロおやじね。…よし。俺と一緒に行く。行くぞ—
—桜木」

うーん。アキからは”仕事の為なら手段を選ばない奴”なんて聞いてたけど

部下の面倒見もよさそうで気さくで頼れる上司って感じ…。

…：そう安心していたのも束の間

その取引先でアキの言っていた意味をこの身を以て理解させられる
ことになるなんて

——思ってもみなかった。

何度も通ったパッケージのデザイン業者に着くと、通常通り秘書に部長室へと通され

部長のスケジュールは常に詰め詰めらしく

このソファで数十分待たされることが多かった。

「…緊張してんの？」

いつもと違うのは、隣に柚城主任が座っていること。

『最初はいつも世間話から始まるんです。だから今日の話題を探してて…』

「茶飲み友達かつーの。欲しいのは”承諾印”手っ取り早くいくぞ」

そう言って少し目線を上げて遠くを見つめている

柚城主任の自信満々な横顔がとても頼もしく感じて…

今日こそゴーサインがもらえるのだと安心しきっていると

柚城主任からまた謎めいたことを問いかけられる。

「なーリップグロス持ってる？」

だから私は首筋が伸びる位首を傾げながら鞆からピンク色のグロスを出す

柚城主任は素早くサッとそれを取り上げた。

『グロスに何か意味があるんですか…？』

意外に可愛い所があるからまさか何かのおまじないとか：？

「付けてやつから口軽く開けて」

そう言う前にも問答無用で私の首にガツシリと手を添えて
目の前でグロスを構える柚城主任

私がお洒落した所で何が変わるんだろうと疑問が疑問を呼んで目を
パチクリさせていると

状況を判断するより前に唇に感じる、温かな：：感触――

「――んっ！！？？」

唇を離そうにも首にハビコった手がそれを許してはくれなくて
柚城主任の胸をバンバン叩いて必死に抵抗を訴えかけても離しては
：：くれない。

時間をかけて乱されていく感覚にポーッと色づく思考
解されて抜けていく：全身の力

初めて覚え込まされるキスに体はゾクリと震えるのに
体中に流れている血は：騒ぎ出す。

それでも唇が離れても呆然としている私の潤った唇に
リップグロスを丁寧に塗っていく柚城主任

「：よし。”お願いします”桜木はこの一言だけを言えばいいから。
――：その火照った顔で」

一体、何ごと——？

：——どうして？ 柚城主任の言った通りにしたら

いつもは最後まで渋り通す部長もアツサリと承諾印を押してくれた。

「……やったな！」

建物を出て一息ついていていた私に手渡されたのはパックのいちごみるくジュース

私ってやっぱりこうゆうお子さまなイメージなんだとがっくりときている時

柚城主任からは、ばななジュースを啜る音が響く。

さすがに自動販売機に”キウイ”はないよね：

なーんてどうしようもないことを考えながらストローをくわえる口元を見ていると

思い出す：さっきの熱いキス——火照りだって：まだ消えない。

「桜木と接点を持ちたかったから企画に承諾しないで何度もお前を呼びつけてたんだ。

：……。それ位気づけて。桜木のお色気にエロおやじもノックアウトだな！！

：……どうだった？ 俺の戦^{キス}略」

『まさかそんなことの為にあのキスを……？』

「おう！それがどーした」

悪びれもせずに放たれる爽やかな笑顔

こんな人だったなんて信じられない……っ。

『色仕掛けで承諾印を押させるなんて!!』

「仕事は結果が全てなの」

そのキス1つにかき乱された私の気持ちはどうなるの？

『最っ低です——!!』

「最高の褒め言葉をありがとう」

この人、とんでもないサディスト……

今になってアキの忠告がヒシヒシと身に染みてきていた。

この人は仕事の為なら何でも、する——

…この日会社を出れたのは定時を大幅に過ぎて。

家に帰ると着替えを済ませたアキと廊下で出会い

植え付けられたこの何とも言えない気持ちをどうにかして欲しくて
甘えたい気持ちを最小限に表す為にアキの手に指を絡めた。

「みゆ……？ 父さんがいる」

そっ……か……今日からお父さんもいるんだ

「……何かあったのか？」

けれど、アキに話した所でこのモヤモヤはどうにもできない。

これは、私の気持ちの問題――

『なんにもない…』

ただ、ちよつと…ちよつとだけ。「男」のアキの温もりを感じさせて…。

居間に行くとタカにいても来ていて約1年ぶりに家族全員で囲む食卓

お母さんと私がお酒のお供作りに大忙しの中

お父さんとタカにいはお酒の力でテンションを上げ

アキは無表情で飲んで注ぎ足されるお酒を飲み続けていた。

そんな賑やかなテーブルに空いたお皿を下げに行くとアキに絡むお父さんの言葉に

「アキもそろそろ身を固めないとな」

嫌な予感が…体を硬直させる。

「婚約者として申し分のない融資会社のご令嬢なんだがな。

…そろそろ結婚を考えないか」

パリ：ン――！！

「……相っ変わらずそそっかしいなあゝみゆは！」

動揺を隠せない私を笑い飛ばしてフォローしてくれるタカにいの声

にハッとして

割れたお皿の破片を拾おうとするけれど

視界も、思考も、心も。揺れ動いて焦点を定めてくれない
震えた指先に血が滲んでも痛みだって、感じない――。

「先方がエラくアキを気に入ったようだな。

次の日曜に会いたいと言ってくれているんだ」

いつかこんな日が来るんじゃないかって思ってた。

将来会社を守っていくアキには妹の私なんて以ての外で

タカにいと同じように会社の利益になる結婚が望ましいこと位
私だって、分かってるけど…

それでも私を選んでくれるってアキは言ってくれたけど…

『アキが結婚なんて全っ然！！似合わないーい』

取り繕おうとすればする程涙が瞳を湿らせていく…

いいな、いいな。みんなから祝福される関係
羨ましいな。”婚約者”ってゆう特別な距離

『アキの奥さん務まる人なんているのかなー？』

欲しいな…無条件でアキの隣にいられる権利

「こらこら。兄ちゃんの幸せ位素直に願ってやりなさい」

そしてその”父親”のセリフにグッと堪えていた涙が目尻まで浸透

すると

アキは冷静に言葉を投げつける。

「血…洗い流して来いよ」

『——っうん：』

アキと繋がったこの血が流れてこのまま体から全てなくなってしまう
えばいいと

心底…思った。

#4 兄妹のキョリ ―?―

side アキ

みゆを一番に可愛がる父さんがみゆの傷口にも触れず話を脱線させない

「既にセレモニーで顔を合わせているそうじゃないか。
ゆっくり話をしてみるといい」

それは会社の経営状況が相当厳しいと言う事実を物語り
”融資会社”の令嬢の縁談話にも危機は表れていたが
とりあえずは父さんの顔を立て、後に何かしら理由をつけて俺は断るつもりでいた。

『会うだけでいいなら会おうよ』

今はそんなくだらない事よりも
唇をクツと噛みしめ必死に涙を堪えていたみゆが気に掛かって仕方がない。

居てもたつてもいられず席を立ちみゆがいる洗面所へと向かうと
扉一枚を挟んで聞こえる水が勢いよく流れ出る音
その音に紛れる音無き哀しみの嘆き

少しでも不安を軽減させてやりたいと思い
キツチリと閉められた扉のドアノブを握るが、それを遮る力強い握力に覆われる。

「……おい。家で何をするつもりだ？」

兄貴に血流が止まる程に腕を握られようが構いはしなかった

『放っておけるかよ……』

この扉の向こうで恐らく……いや、絶対に。みゆは泣いている。

「気持ちとは分からないでもねえが状況を考えろ、アキ」

会社？家族？——どうでもいい。

守りたいものが守れないならば何だって捨ててやる

『……放せよ』

「お前の覚悟の程は俺も理解しているつもりだ。

だがなあ今問題でも起こして専務不在になられたら俺は困んだよ。

お前のその怖いもの知らずな所がたまに恐ろしくなるぞ……」

みゆの事だけを考えてやりたい。

だが、兄貴にここまで言われると踏み出せない自分もいる。

「お前らの事は俺も出来るだけフォローしてやるつもりだが
周り見えてなさ過ぎるぞ？……冷静になれ」

そして俺は、無念の情に駆られつつも

ドアノブに掛けた手を放しきつく、グッと拳を握り締めた。

想いは通い合い体は幾度も重ねた

だが今はこの数センチの扉の距離が遠く、遙か遠くに感じる

兄妹として生まれ育って来た俺達を挟む壁には
目に見えない距離があった。

——次の日の出勤前。恐らく昨夜はさほど眠れなかったのだろう
目の下に分厚いクマを残し
浮かない表情を終始俯かせているみゆをさり気なく誘い出す。

『乗って行けよ』

みゆを従え玄関扉を開けると、天にはむかつく程の青空
地には憎たらしい程爽やかな安東の姿

「お早う御座います、専務！……と、みゆ様！！」

そして静かなエンジン音が響く車内では

腹立たしさも通越す程の安東のお調子者振りが発揮されるが故

「日曜に行われる逢引の件は社長よりお聞きしていますので
お迎えに上がらせて頂きます。

幸せ街道まっしぐらで羨ましい限りですよ。ヨッ色男！！」

その適当な持ち上げに軽く呆れながら隣にいるみゆに目をやると
変わらず俯いたまま昨夜と同様瞳を揺らしていた。

『……よく聞けよ？社長の顔を立てる為に会うんだ

”婚約”なんてものには何の意味も無い。それが俺の幸せでも無い』

俺からしたら本来、これ位で泣く女は面倒の部類に入る訳だが、みゆは別だ。

放って置く事等、出来やしない。

「…そうなんですか？とびきりの美人さんかもしれませんよ？

この際試しにお付き合いしてみるのもいいと思いますけどねッ」

『どんな女だろうが興味無いよ。

そんな事の為に大事な女の機嫌を損ねたくないんでね…』

「OH 成る程！もう心に決められた方がいらっしやると！！
専務も見かけによらずやりますね」

この安東の呑気さに紛れる様に

『――聞こえたか？』

そう呟きを漏らしながらみゆの細い指をキュッと握ると
その指は弱々しくそれに応え、みゆは二度コクコクと頷いた。

「秘密」と言う関係がもたらすその、切なさは…

『日曜：部屋見に行くんだろ？早めに切り上げて来る』

その笑顔と言う愛しさに俺が変えてみせるから

俺のいない所で、どうか。泣かないで――。

だが、俺に待ち受けていた”婚約者”と言う家族のシガラミは
兄貴や俺が考えているよりも奥深くまで根付いていた。

そのシガラミによってみゆが究極の選択を強いられる事になる等
誰も、予想もしていなかったんだ。

——そして待たずとも自ずと日曜はやって来た。

朝食後、みゆとの待ち合わせ時間を確認し合った後
融資会社の令嬢と二人で昼食を共にするようにと段取りされた
某一流ホテルの展望レストランへと向かう。

その奥まで足を踏み入れると時たま食器の重なる音だけが鳴る落ち
着いた空間が漂う中
窓際の席で立で立ち上がり、俺に向け手を振る女が高級レストラン
の緊張感を壊す。

「アキさーん！」

まだ記憶に浅い甲高い声、幼き頃のみゆの記憶を甦らせるあどけな
い笑顔
セレモニーの時の女が相手なのだと俺はすぐに理解した。

そして軽く会釈をし席に着き飲み物が揃うと

みゆの「妹」の面影を纏った女はすぐさま口を開き出し

「改めまして。篠原しのはら 亜子あこです」

軽く挨拶を交わしている間にも俺の顔をまじまじと覗き込み不快を
煽る

この間から何なんだよ一体…

「アキさんていつもそうなんだ…何があっても冷静さ崩しませんって感じ。」

わーい♪こうして話せるなんて嬉しい!!」

大して言葉を発しない俺に喋り続け、そして無駄に舞い上がる女
最も苦手なタイプの筈がチラチラと過ぎる妹の記憶に俺は惑わされていた。

「実はある人から聞いててアキさんの事ちょっと前から知ってたんです。」

人目見て気に入っちゃったー♪」

だからだろうか。そう嬉しそうに話をする姿を気の毒に思い
先に話して置こうと咄嗟の判断が口を滑らせていたが

『亜子さんて言ったっけ。悪いけどこの縁談、俺は…』

「あーこ!」

……は?

俺が真面目に話をしている最中に口を縦に大きく開く仕草に思わず
呆氣に取られる。

「ねー”あこ”って呼んで?」

『……亜子。君と結婚する気は毛頭無い。

今日も父さんの顔を立てに來ただけなんだ、悪いな。』

そう断りの文句を並べても目の前でニコニコとしている
”亜子”と言う女が不思議でならない。
俺の言葉がきちんと伝わっているのだろうか…。

面倒臭そうな女に気に入られてしまったものだと
半ば気が遠くなりそうな時だったからか、その時背後から響いた声
に若干救われた。

「おっと！偶然だな！！」

「こんな所で女と商談？……な、ワケねーよな」

この声は…と視線のみ横に向けると、薄笑いを浮かべ俺と亜子を見
下ろす…隆。

「私、アキさんの”婚約者”の篠原 亜子です！
お手洗いで行って来るのでよかったらどうぞ」

ああやはりこの女、理解していない様だな…と溜息さえ漏れた瞬間
気を利かせたつもりか、亜子は隆を席へと誘導し気分よく席を去っ
て行く。

「ほーアキもとうとう見合いか？社長の息子も大変だな！
しかしアレが大口融資先の令嬢？

あんな美人なら言う事ねーじゃん？胸でけーし。」

相手が”大口融資先”とまで知っているとは相変わらず犬の嗅覚並
の情報収集力だな…

どこで聞いたんだよその情報…

そう眉をしかめつつも少し冷めた珈琲に口を付けると

窓の外の景色をぼんやりと映していた隆が棒読みでいきなり台詞を
呟く。

「なーアキ：俺どうやらみゆが気に入ったみたいなんだわ：

みゆの彼氏ってどんな奴？」

隆が女に興味を持つ事自体に多少驚いてはいたが

女を選びたい放題の隆がみゆを気に掛けるのは

A B型特有のいつもの気まぐれだろうと俺はまだ高を括っていた。

『さあな…』

更には、セレモニー時みゆの存在を隠した

俺への当てつけだろうと半分呆れていたが：

「あんな濃厚なキスマーク付けてあのウブさはたまんねーよな」

その隆の独り言で脳内に電気を帯びた光が走る。

襟に隠れる様にと丁度胸の谷間に付けたんだ

上から覗き込みでもない限り見える筈が、無い。

『みゆに…何をした？』

「ヤメロって！」妹思いのアキ”がツボに入って仕方ねー！！」

そうお気楽に高笑う隆に渦巻く苛立ちが頂点に達し、視線を厳しく
突き刺すなり

「アキが知らねーって事は彼氏いねーのかな。いたら言ってるやんのかな…」

俺の怒りをねじ曲げる様に隆は真面目に語り出す。

『…——へえ。その男に何て言うつもりだ?』

言ってみろよ…

「そんなん決まってるだろ?」

——今。俺の目の前で。

「……」俺にくんね?」

みゆを”くれ”だと…? 誰がお前なんかやるかよ…

そうして静かなる怒りに火が灯されると

隆はフツと薄笑いを浮かべ椅子の背もたれに態度でかく背中を預ける。

「そんな怖い目すんなって! 取って食いやしねーよ。

一応俺の部下だし? 我が社の大事な令嬢な訳だし?

意外とやたらエグい男がいたりしてな!」

”冗談を真に受けるな”とでも言いそうなこの言いぐさ

前々からそうだった。隆は俺の怒りを反らすのが巧い

この浮ついた性格からなのかそれとも意図的なのか…考えたくも

ないが。

「社長や副社長が妹を溺愛してんのは聞いてたけどな：しっかし、まさかまさかのアキまでもか！！」

だからどこから仕入れて来るんだよその内輪的情報を：等とどうしても良い事に悪態をつく暇も無く、垣間見える隆の自信

『…そこまで解ってんならみゆに手を出すなよ？』

「——それはどうかな？あの調子だと落ちるのも時間の問題だ」

”あの調子”——？

一流メーカーの珈琲カップをガシャン：と雑に受け皿に戻すと立ち上る熱い憤怒を消沈させる気の抜けた声が耳に障る。

「わぁっアキさんが怒ってる」

隆に氣を取られ過ぎてどれ位気づかないでいたのかテーブルに顎を乗せた亜子が上目遣いの熱い視線を俺に送っていた。

「アキさんの色んな表情を見れるだけでドキドキする♪

”好き”ってこういう事なのかな」

このあどけなさストレートさに苛立ちも後味悪く削ぎ落とされ、残るのは大きな溜息

後に隆が椅子を引く、小さな風音

「どうやら俺はお邪魔ムシ？…：またな、アキ」

は？話し込んでた割にはアッサリ過ぎだろ。隆は一体、何をしに来たんだ？

わざわざ亜子の顔を見に？それとも、みゆの男を探りに…？

一ホテルに入る一レストランでの偶然等そうそうある筈が無い。

そうして俺がチラつかされた謎を前に難しい顔をしていると隆のいた席に座った亜子は変わらず目を輝かせていた。

「亜子ね、結婚はどうでもいいの。」

偶然でも”婚約者”になれば無条件でアキさんの側にいれると思っただけだから…」

——偶然とはまた、人が作るものでもある。

やがて俺の言葉が伝わっていた事に驚く暇も与えず、鋭い釘を刺す亜子

「アキさんの会社の大口融資先破綻しそうなんですよ？」

亜子のパパ機嫌損ねると大変だから、アキさんから破談はしないでね？」

意外にも話が解る女だと感心していれば、単なる脅しかよ…。

”大口融資先 破綻の危機”

恐らく、この現状は社内でも一部重役のみぞが知るトップシークレット

先日の兄貴の厳しい眼差しに込められた危機感を俺は今になって理解したんだ。

「だからね、亜子とたまに会ってくれるよね？」

専務とは言えどもみゆの為なら会社を簡単に捨てれる覚悟でいる俺と会社に一生涯を賭けている兄貴とでは深刻さも危機感も違う。

俺とみゆの関係を知りながらも陰ながら見守ってくれる兄貴を無碍にも出来ないとなると

そう我が儘も言っていられないか：

『分かったよ：”たまに”な』

むしろ”結婚は無い”と理解しているなら俺にとっては好都合

「ねーこれから何処に行く？」

そうなると問題は：

みゆに泣かれるのが一番堪えるんだ：

『悪いな：この後大事な用があるんだ』

「亜子よりも——？」

当たり前だろ：なんて口に出せば泣き出しそうな勢いだ

「もっと話してたいのにな：

残念そうに眉をひそめる仕草、この甘えた口調にすがる目つきこれらがたまにみゆと重なり許す心が芽生えそうになるがそれがみゆでは無いと言うだけで拒絶する条件は全て揃う。

『ああ：“今度”な』

——そして。亜子の相手をするのも面倒になった頃
車をホテル入り口に着ける様安東に連絡を入れ俺はおもむろに席を
立ち

『：——この人を家まで送ってやってくれないか』

ようやく亜子を引き離す事が出来るのだとホッと胸をなで下ろした
時だった

「了解まし：」

ホテル正面入り口で亜子を見た安東の表情が一変して凍り付き
背後からの亜子の声に安東は即座に顔を背ける。

「あれー？タケちゃん？ここで何やってるの！？」

俺の背後から飛び出した亜子は
気まずそうにそっぽうを向いた安東へと戸惑い無く飛びかかり
逃げ続ける安東の視線を追いかけ始める。

「今”車”って言ったよね？今アキさんに敬語使ってたよね？

ねーねー何でこんな所にいるの？ねータケちゃんってばー！」

どんな間柄なのかは知らないが
それにしても鬱陶し過ぎる詰め寄り方をされる安東が気の毒でなら
ない。

『……知り合いか？』

どう見ても知り合いだが。

「亜子の幼なじみなんです！

昔から家族ぐるみで仲良くしてるんだよね？ねーってばー！！」

……そうか。安東は迷惑そうだが俺にしたら都合が良い。

『安東は俺の運転手なんだ。良かったな亜子。送ってもらえ』

そう言葉を投げ飛ばしタクシーに手で合図を送っていると

亜子は悩ましそうに人差し指を唇に当てる。

「え？アキさんの会社が雇ってる運転手なの？

だってタケちゃんだって亜子と同じ……」

「わーわー！！亜子ちゃん！！専務の前でやめてよッ：

専務：どうしても送らないと駄目でしょうか？」

あからさまに亜子を避けている安東に申し訳なくも思ったが：

『——命令だ』

俺はここぞとばかりに権力を振りかざした。

気の知れた仲だと聞いてしまった事をいい事に俺は亜子を安東に押しつけたんだ

家同士が繋がった幼なじみなら

二人で話せば安東のわだかまりも消えるだろうとさえ思っていた。

更にはこれから亜子と会う時に安東も混ぜれば
みゆの不安を少しでも和らげる事が出来るとそう安易な思いを描いていたんだ。

人生に未知数散りばめられた——偶然——

それが「兄妹」と言う間柄だったとしてもその一つの”偶然”が無ければ

この世でみゆと出逢う事は無かったに等しかったんだ。

有り難い奇跡だな：そう感謝をしていたのも束の間

隆と言う偶然、亜子と言う偶然、その作り上げられた奇跡は後に俺とみゆの奇跡を揺るがす大事件を招く引き金となる。

桜木のシガラミからやつとの事で解放され、足取りは軽くなる一方

みゆとは物件の最寄り駅である

地下鉄「表参道」駅の真上にある交差点で待ち合わせをした。

日曜の表参道は人混み溢れていたが、タクシーを降りすぐに視界に入る

逆車線側の角に建つビルの壁にもたれ掛かったみゆの姿

携帯を開いては閉じ時間を確認する姿からも

じっとはしていられず左右小刻みに首を振る仕草からも

隠し切れない不安が伝わって来るが故に、俺の第一声はこれだった。

『何分前からそうしてんだよ…』

交差点を渡り歩み寄りつつそう投げ掛けると

みゆは目線を宙に泳がせながら空笑いをして見せたりする

「あっえつと…5分前位かな？」

本当に嘘が下手な奴だな…

『俺の事が心配で居てもたってもいられなかったんだろ？』

「たったまたまちよつとだけ早く着いちゃってね、それでね…」

上手く誤魔化せない癖に必死でそれを取り繕う姿が何ともいじらしく
このたどたどしさが俺の意地悪心をくすぐるんだ。

『へえ…父さんの前で泣きそうになってた奴が随分と余裕だな』

そして意地悪を真に受けたみゆは

俺のスーツの裾を小さく摘み潤ませた瞳を力なくキュツと瞑る

「…ほんとはね…すごく心配で1時間前からここに居たの…」

どうして…こんなにも。——可愛いのだろうか。

みゆの涙腺を緩めたのも

薄っぺらいガラスで出来た様な脆い心を作り上げてしまったのも
間違いなく全て俺の責任だった。

その全責任は一つ残らず俺が取ってやるから…

『ばーかみゆの心配する様な事がある訳無いだろ？俺の女はみゆ：お前だよ』

その、幸せそうな顔で、いつも。笑っていて――。

こうしていつまでも

穏やかな笑みを恥ずかしげに浮かべながら俺の後を着いて来るのだとこの距離が離れる事は無いのだと俺は、信じ切っていた。

だが：この時俺たちに運ばれてきいた偶然が

みゆの事を思いあえて取っていた「兄妹の距離」に

埋める事の出来ない溝を：作り出す――。

#5 ナミダの行方 一?一

side みゆ

街がクリスマスを意識し出す11月の表参道

肌が空気の冷たさを感じ出しても止まることを知らない交差点を行き交う人々の群れ

その中に紛れて私はいつものようにアキの一步後ろを歩いて
そしていつものように前後に揺れるアキの手を目で追っていた。

腕を組んで歩きたいな。手を繋いで歩きたいな。”恋人”がしたい、
な――。

”婚約者”の女の人ってどんな人だったんだろう？何を話して来た
んだろう？

気になることは沢山あったもアキは詳しいことを一つも話してはく
れない。

アキってこうゆう人。

でもこの自信溢れる背中を信じて

私はアキの後を着いていけばいいってことだね？

ねえ、アキ：もうすぐ、クリスマスだよ……。

表参道の交差点から裏路地に入ると住所は「南青山」

新宿にある会社を中心とすると

実家とは反対側に位置するこの区域は住宅街にしたら一等地
都内でも土地や家賃の価格が飛び抜けて高いこと位私だって知っ
てる。

そして不自然な位キヨロキヨロと周りを見渡す私を背にアキが立ち
止まったのは
首筋がピンと張る位見上げないとてっぺんが見えない超高層マンシ
ョンの前だった。

『…こ、こ………？』

アキの満足げな表情に誘われてエントランスの扉を潜ると
見渡す限りの大理石の床に壁3階分位ありそうな高い天井
その広いフロアにはソファが点々と並べられていて
そこを横切ったフロントには常駐の受付人がいる。まるで…ホテル
のロビーのよう。

「桜木様お待ちしております」

そして私たちを待ち構えていたように現れた不動産やさんに
迷うことなく案内されたお部屋は32階の1室だった。

青山とゆう立地で見えるからに新築しかも最上階
渡された図面に記された2LDKの間取り図
軽く、立ちくらみが…

「みゆ…？ どうかしたのか？」

どうかしてるのはアキだと思う！！

素材の新鮮さを漂わす新築独特の香り
白を基調としたフローリングと大理石の壁
街ゆく人々も米粒大に見える絶好の眺望

部屋に案内されてもこのグレードの高さに私1人ソワソワと落ち着かない。

けれど気になるのはやっぱり…

『お：お家賃いくらですか？』

歯を食いしばりながら思い切ってこっそりと不動産やさんに聞いてみる

「こちら売買物件ですので価格は9600万円になります」

けれどその内容に頭の回転が追いついていかななくて
目をまんまるくしながら絶句してしまう。ええっ！！——買うの！？

「…気に入らないのか？」

アキの不平な表情にブルンブルン首を横に振るけど
そんなことよりも頭の中は¥マークでいっぱい。

「ここに決めるよ」

「有り難う御座います。では住宅ローンの審査も御座いますのでお申込みを…」

「いや、ローンは組まない。——”キャッシュ”で」

キャ：キャッシュー!!（＝現金）

9600万円をサラリと”キャッシュ”と言えてしまうアキって一体：

専務ってそんなにお給料いいの？私のお給料何十年分だろう？
だめだあ：頭がクラクラしてきた…。

「みゆ…？具合でも悪いのか？」

『アキ：もうちよつとよく考えようよ…』

具合だって悪くもなるよ：文句のつけようもない素敵なお部屋だけど、けれども…!!

「いずれはお前も住むんだから気に入らないなら早く言えよ？」

え——…。ねえ。アキは気づいてる…？

今のセリフに紛れた一言が一生聞けることのないどんなプロポーズの言葉よりも
嬉しいセリフだってこと……。

そう幸せに涙を浮かべていたのもほんの束の間

「ではご契約書類の準備をして参りますので」

不動産やさんが去った途端に陰しく変化するアキの顔色
そして私の後ろの壁にドンツと片手を付くと：

「…——みゆ？俺に言う事、…あるよな？」

もう片方の1本指を私の胸の谷間にグッと押し刺す。

一枚の布を挟んで指し示されたまだ薄く跡が残っているアキのキスマーク

愛の言葉も凍り付いてしまうご機嫌斜めなアキの眼差し

柚城主任があのお調子口調で何か言っただろうけど
アキはどこまで聞いてるんだろう？

『何の、こと…？』

「何度も言わせんな。隆と何があった？…コレを見られたんだよな？」

そう：アキにこう聞かれるのはもう3度目

『コレはその：転んだ時にたまたま見られちゃって…』

でも、このアキの不機嫌さの度合いを見ると：

「他にもあるだろ？」

その先にあったキスのことなんて絶対に言えないっ…。

『な、ないよー…？』

だってアキ怖いんだもんっ。

刺さった1本指が胸から離れていくから巧く誤魔化せたことにホッ

と一息漏れると

目の前には何故か得意げなアキの笑みがあって安心したのも一瞬

「へーえ意地でも言わない気？」

そう悪戯に口角を上げると私の膝に落ち着いていたアキの手は強引に膝丈のスカートをまくり上げていく。

『えっえっ：アキ！？』

太股に滑り込んでゆく熱い手の温もり
ウブ毛をなぞるだけのような変な触り方
そのくすぐったい感触に体は素直にゾクツと反応する。

『はっ：：あ——：：』

家具も何も置いてない空の部屋だからか
思わず漏れてしまった声が思った以上に響き渡っていて恥ずかしさが押し寄せてくる。

「隆に何かされたんだろ？まだ言わない気ならもっと響かせてやろうか？」

：——その鳴き声」

そう耳元で囁きながらも、辿り着いたショーツに指を掛けてクイツと上に引っ張るから
感じる部分にショーツがグイグイ食い込んでいく：
事実を問い詰める指に力が入る度、食い込んだ布が擦れて：もう：だめえ：

『ん：あつあれは違うの！！承諾印の為のキスで…』

ハッ：！！！

『あつ。ちがつ：口がね？つい、勝手に？滑っちゃって…』

ああ：っフォローになってないっ。

そして恐る恐るアキの顔を見上げると

悪戯な表情ばかりか得意げな笑みさえ消えていた。

「お前な…：…」

許して。アキ…：…。

太股を鷲掴みにされた痛みに視界をキュツと狭めるけど
私の唇を撫でる逞しい指は何故か切なくなる程優しくて：

「仕事でも必要以上に隆とは関わんな。

これ以上、指の一本だって触れさせたくない」

その声は自信に満ち溢れていて：

『はい——…：。』

柚城主任の唇の感触なんてもうどうでもいい位
アキの感触で満たされたくなる。

「誰にも渡す気はないからな？」

そう鋭い瞳で私を突き刺して唇が微かに触れ合うと
今度は甘く、優しい吐息が私の唇の隙間に吹き込まれていた。

「舌出して…みゅ…」

：——へ？

『なん、で——？』

その行為のあまりの恥ずかしさとアキのしようとしていることへの
疑問で

何度もパチパチ瞬きをしてしまう。

「キスしようとしてるんだけど？」

そして平然とした返しに驚き戸惑って思わずアキの胸に手を突っ張
る。

『どっどこでそんな技を！？』

「普通だろ…逃げんな。」

そんな”普通”私：知らない…っ

それはキスなの？キスの一種なの？みんな、してるの…？

『…今まで付き合った人として、たの……？』

私は知らないのに。アキの元カノたちはそれを普通にしてたの？

今更過去に嫉妬したって仕方のないことなのに

それが、私だけが知らないアキの一面なんだと思うと
とてつもなく大きな臆病に捕らわれて、身動きが取れなくて
頬も伝わずパタパタと数滴零れ落ちた：痛みの、雫たち。

分厚い両手に包まれた頭が勢いよく逞しい胸に引き寄せられると
私の頭をギュッと抱えたままアキはただ、一言。口にした

「それ位で泣くなよ：」

どうして：ちゃんと答えてくれないの？

私は”それ位”で。胸が張り裂けそうになるよ——：

アキはこんな私のどこを好きになってくれたのかな？

見た目に特に秀でた所もなく女としての色気だってない。

そして何より：アキのしてきた恋愛とはきつとレベルが、違う——。

『今まで付き合った人はみんな色気があって床上手で

アキを満足させられるような大人の女の人だったんだよね？』

こんなこと言ってもアキを困らせるだけなのに

劣等感から生まれた不安が募る程言葉に拍車がかかってしまう。

『それに比べたら私なんて子供っぽいし、初体験だって遅かったし
：』

「：イラナイことまで暴露してんな」

付き合った人数も、経験人数も私とはケタが違うんだろうな：

『アキはきつと沢山経験してきたんだよね?』

「聞いて傷つく位なら聞くなよ」

そうだけど。知りたくないけど、知りたい…。

13年間の空白がある上にアキと過ごした期間は僅か半年
アキのことをあまり知らないのも当然なんだ…

この目に映ったアキしか。私は、知らない――

「心配すんな：俺の手で。大人の女にしてやるから」

心臓が押し潰されそうになるまで抱きしめられたアキの腕の中で
想いのままにただ涙を流すだけの私に
”婚約者” っ て聞いただけで涙も抑えられない私に、アキはきつと
呆れてる。

『”その位”で泣いてちゃだめだよね…』

もっと。アキに近づきたいよ

泣いてすがってばかりの弱い女じゃなくてアキに見合うような大人の
女の人になりたい。

「妹」に見えない位、「女」に――。

「いんだよ：みゆはそのままです。そう言う女にしたのは俺だから…
…」

覚悟の一步を踏み出したくてアキを見上げて舌を出してみると
夕日に包まれたアキの微笑みが近づいてくる。

熱い舌先が触れ合うと

まるで繋ぎ合った手の温度を悪戯に確かめていくように私をゆっくりと舐め上げていく

舌だけを絡めるだけのキスは思ったよりも恥ずかしくて、唇までの距離がもどかしくて

すぐく：いやらしい気分になせられてしまうなんて……。

これだけで逆上せてしまいそうになる私にはまだ、刺激の強い——大人の、キスだった。

アキの隣にいる為には、このままじゃ：だめなんだ——

：——数日後。この高級マンションの売買契約が締結されたけどアキが仕事で忙しいのもあって引越はクリスマス前に延長。

それとは逆に時間を持て余している私は日々

アキに言われた通りに柚城主任と距離を置くことを心掛けていた：：つもりだった。

——今は12月頭。愛しい人肌を恋しがる寒さに耐えながら迎えたこの日

ここ毎晩真夜中に帰宅するアキとすれ違いの生活をしていることに寂しさを募らせながらも私は通常通り出勤していた。

一流企業の会社とだけあってビル一塔まるごとうちの会社：いわゆる自社ビル。

出勤に追われる社員の群れに紛れ込まれながら
低めのヒールで1階フロアをカツカツ鳴らしてエレベーターへと向
かっている

一変して張り詰める：群れの空気

人々の視線の先には入り口の自動ドアを潜る専務の姿

社員の誰もが足を止め次々と軽く会釈をして丁寧な挨拶の声を響か
せていく。

専務になっても変わらない眉一つ動かないキリッとした表情

少しも隙を見せない自信に満ち溢れた英姿：アキ独特の存在感と威
圧感

私は、何をすれば：アキに近づけるんだろう――？

そんなことを思い巡らせながら

周りにいる女子社員たちと同じ憧れの視線を送っていると

1階フロアに響き渡る異色の声に社員皆が騒然とした。

「ア。キ。さー！ーん！！」

私に近づくアキの足取りを阻んであの逞しい腕に飛びつく女の人。

その姿は女の子らしく小柄で誰もが羨むお人形さんのようなクリク
リとした瞳

可愛らしさが滲み出た笑顔

それでも表情を崩さないアキの腕をグイグイと引っ張ってアキを揺
さぶる彼女は

きつと：アキの隣に無条件でいれる権利を持った：――「女」の

人。

「なあーによあのブリッコ女あ。見ててちょおーム力つくうー!!」

その光景を人事のように遠くから見つめていると

いつの間にか私と足並みを揃えていた絵里花が私の腕の横からぬう
つと顔を出す。

”ブリッコ” って：絵里花も人のこと言えないと思うよ……？

表参道で待ち合わせた時アキが私の心配を取り除いてくれたから
”婚約者”も建前だけなんだって安心に身を寄せていたけど
あのアキを見つめる瞳を見てれば分かる。

あの人：アキのことすごく、好きなんだ――…。

「男って単純だからああーゆう女にコローツといっちゃうんだよね
え。

まあ？あれ位じゃあたしのテクの足下にも及ばないけどお」

妙な所でライバル意識が芽生えている絵里花のセリフが
胸に：心に。グサリと痛く食い込んでいく。

「アレが例の婚約者かあ：主に：専務もおーまんざらでもなかった
りしてえ」

そっそんなことないもん。アキはあんな手にのらない：はずだもん
……っ。

「うむむ！あのデカパイは女にとって最大の武器ナリ。
あたしの透視能力によるとGカップだねえ。そこだけは負け認め
てあげるう」

…って言いながら私の胸を見ないで欲しいっ。

「みゆうちゃんと揉んでもらってるのお？」

はあ：絵里花といると元々ない自信が更に底をつくよ…。

「社長令嬢」が似合う華やかさとそれに負けない綺麗な顔立ち
それなりの身分が滲み出てる高級ブランドで固められた装い
それに加えて推定Gカップ…

張り合えそうな所さえ見つけられないとひどくしょんぼりしていると
背後から迫り来る魔の手に…

「安心しろ！俺はこの掌サイズで我慢してやつから」

両方の胸を鷲掴みにされていた。

『ひあ——っ！—！』

「うっわ。ひでー色気のねー声」

このあるまじき行為に悪びれもせず更には文句をつける柚城主任

『セクハラやめてくださいっ！—！』

「ばかばか。貴重な意見をセクハラで片付けんなって。

俺のこの心の広さを有り難く思え桜木！」

な、なんて勝手な言い分！？と頬をたっぷりと膨らませている真っ最中だった

私を覆い隠す暗黒色した長い影、ただならぬ悪寒を醸し出す大きな人影に
ゾッ…。と身震いが押し寄せる

「おい——何やってんだよ…」

専務に挨拶を終えた社員の意識が双方に散らばっていく中
この一角だけは別世界の重苦しい雰囲気

視界の片隅で私を淡々と見下ろすその温度の低いアキの眼差しはあまりにも怖すぎて
思わず、目を伏せてしまう。

アキが怒るのも無理ないけどこれは不可抗力であって：
そう頭の中で柚城主任に責任を擦り付けている間にもアキは荒い波風を立てていた。

「手出すなって…言ったよな？」

「俺、”出さない”って言った覚えねーけど？」

ぶつかり合う2つの尖った視線、口を挟めない程の緊迫感
それにも構わず絵里花のブリッコ口調は堂々と割り込んでいく

「あのお専務！そーんなマスコット腕にくっつけてえ

まずは自分の身の振り考えたらどおですかあー？
人を責められる立場じゃないと思うんだけどなあー」

絵里花ったら相変わらず怖いものなし…。

今のアキにここまで言えるなんてこれだけは尊敬しちゃう。

「木村の言う通りだなー」 あにき” みゆはお前のもんじゃねーんだよ」

「セクハラ主任のものでもないと思いまあーす！！」

浮ついた口調とは裏腹に目は笑ってないのに絵里花が追い打ちをかけるから

柚城主任も唇の端をピクリと動かして苛立ちを露わにする。

荒波を一層荒げるだけ荒げてフンっ！と気分悪そうに絵里花は立ち去っていくけど…

どうしてくれるのこの状況っ！！

お願いだから…これ以上アキを挑発するセリフを言わないで欲しい。
柚城主任の性格からして平然と言い放つから沈黙の間もハラハラが、止まらない…。

「…ったく。胸揉んだ位で目くじらたてんなって！！柔らかさは保証してやつから」

けれどその意味の分からない発言に首を傾げたくなっていた時
アキは瞼を重そうに閉じた後時間を掛けて開いてゆっくりと持ち上がる右腕

固く結ばれた拳は柚城主任の顔をめがけて…

「今の…もう一度言ってみろよ」

—— 一直線に。伸びていく…

専務が公衆の面前で騒動なんて！！そう慌てて両手でアキの腕を押さえようとするけれど
止めたのは私じゃなくて。

足のつま先から頭のとっぺんまでじっと私を見回し続けていた——
—彼女だった。

「アキさーん。この人だあれ？」

額から出たような猫撫で声で豊かな胸を押しつけながらアキの腕にしがみつく

甘え上手な仕草も、可愛い…。

人のことは責めて自分はいいの？アキこそその冷たい態度で振り払えばいいのに。

ズルいよ…私だってアキに触られたくない。今この場で怒ったりしたいのに。

「……”みゆ”って言うんだ」

あえて「妹」の単語を避けたアキの私への気遣い
それでも「彼女」とは呼ばれないこのやりきれなさ

『妹”の——みゆです』

「なーんだ妹さんだったの♪初めまして。”婚約者”の亜子です！」
ギャラリーの誰が見てもアキのヒカリの存在は私じゃない。

「仕事場まで押し掛けて何しに来たんだよ…帰れよ」

「上野美術館で今やってるゴッホ絵画展のお誘いに来たの！」

亜子の”パパ”がアキさんと見て来なさいってチケットくれて！」

”パパ”の単語に眉をしかめるアキを見ると断れない誘いってこと
位私にだって分かる

会社の為ってこと位私だって理解してる

「絵画鑑賞した後隣にある上野動物園でデートしたいの。ねーいい
でしょ？」

私はカゲの存在でもアキの愛がここにあるから満足だもん。でも…
どうして？

俯いて口を思い切り噤んでいる私に声を掛けてくれるのは——アキ
じゃないの？

「お？桜木も行きたいのか？」

『パンダ：いいな…』

「その歳でパンダかよ！！本当に桜木は可愛いな！よし。俺が連れ
てってやる」

本当はパンダなんてどうでもいい。

でも、咄嗟に出たこんな一言まで私は…子供っぽい。

こんな自分が悔しくて、情けなくて。涙が流れたって必死で涙腺

に訴えるけど
決めたの――「大人」になるって。

#6 ナミダの行方 ー?ー

side アキ

朝から派手な押し掛けをする亜子

その鬱陶しさも消え失せる程俺の感情をかき立てる隆の挑発

キスをされた上に胸まで触られ拒否も出来ない隙を作るみゆに

予想以上の危機感を覚えさせられると同時に怒りの矛先は隆へと向かう。

頭の賢い隆の事だ。恐らくみゆの性格を見抜いた上でその隙を狙ってやっている。

だが、疑問が残る。仕事に関して完璧主義だからこそ

プライベートを一切挟まない奴が

何故会社の最も目立つこの場所で女に手を出すのか…?

思考は冷静に疑惑を追求しても握った拳は耐えられず小刻みに震えていた。

拳を振るった所でみゆに触れた事実が消える訳では無い

拳を貫いた事でこのトグロを巻いた怒りが治まる訳でも無い

憤怒と虚しさの狭間を往復し亜子の執拗な揺さぶりに平常心が目覚め拳を治めた時

「パンダ：いいな…」

見失っていたみゆの異変にやっと気づけたんだ。

俺が断れないだろう誘いに我慢が出来ず「妹」として精一杯の反抗の台詞だったのだろう

こうして口をキュツとつばませながら俯く時は必ず溢れる感情で瞳を潤わせている時

俺への愛が涙に変わっているのだと思うとこの位で泣くみゆがいつも。可愛くて…仕方ない。

今。すぐにでも。抱きしめたくなる程に――。

しかし、その隠された瞳にはいつもの様に涙を一杯溜めているのだと優越感さえ芽生えていた時、隆が突拍子もない事を言い出した。

「だったら俺らも一緒に行くか。ダブルデートってのも新鮮でいいだろ！」

『――は？ふざけんな。』

誰と誰が”俺ら”だよ…

「怖え”あにき”の監督下ならなんも出来やしねーって」

「えー亜子アキさんと”二人で”行きたーい」

その亜子の甘ったるい余計な我が儘に被せる様に顔を上げ震えた声を絞り出すみゆまでもが隆に賛同する。

「行く…っ。私も、行きたい…」

――その時、涙は。枯れていた。

：——そうしてやむなく四人で週末に上野へ行く事が決まったがその異様な組み合わせの面倒臭さに先が思いやられていた。

だが、亜子と二人で行きみゆに陰で泣かれるよりマシかと俺と一緒にいるならば隆もみゆに手出しは出来ないだろうとそう簡単に考える事で浮かない気分を紛らわすが

それでも朝の苛立ちが治まらず

社内に一カ所のみ設置された喫煙所で一人一服していた時だった。

「…専務室も禁煙ですか？」

その聞き覚えのある声のする方に嫌々目を向けると

気だるそうに煙草に火を点す岩崎さんが少し間を空け隣に座る。

この女はどうも苦手だが何かと縁の深い女

企画開発部主任の頃の部下でありみゆの最も親しい友人

そして——兄貴の浮気相手

禁断の果実を口に含んだ男女がまた一組身近に存在していた。

「今日は社内が専務の婚約者の話で持ちきりですね？」

この上から目線の物言い、事の全てを見透かした様な嫌味のこもった言いぐさ

木村さんと言い立場関係なく俺にもの申す女達は

俺とみゆの関係を認める唯一の安全地帯だった。

そうして兄貴も好き者だ：と乾いた煙を吐いていると岩崎さんは張

り詰めた声を出す。

「婚約解消出来ないんですか？」

ただでさえ隠れていなきゃいけない女なのにみゆが可哀想」

この若い年齢で纏う気だるさから醸し出される色気、やけに重く感じる言葉の迫力
相変わらず末恐ろしい女だな…

「あまり泣かせてると他の男に取られますよ？」

だが、目線も合わさず淡々とした声だけが響く空間に俺はフツと短く鼻を鳴らした。

「…随分自信あるんですね？でも似てるんでよね…専務と柚城新主任。

——凄く偉そうな所が。」

黙って吸えよ…

『それが何か……？』

朝からの苛々が更に蓄積され煙草の先端のまだ少ない灰を灰皿に落とすと

横から流れて来る白い煙に目を奪われる。

「自分がどうやってみゆを口説き落としたか……覚えてます？」

：——それから言うもの、あの台詞が頭から離れずにいる。
岩崎さんが言わんとする事を理解するにはあの一言で十分だった。

「…あら。みゆったら！背中ファスナー開いてるわよ」

みゆの隙の多さと純粹さを知りながらそれを上手く利用し
抑えきれない想いをぶつけ続けていたのは紛れもない事実

戸惑わせる事で拒む隙間を作らせまいとした俺の狙いでもあったんだ。
だ。

それは隆も…：同様なのか？

「えっウソ！！お母さんしめて」

「もおこんな調子で大丈夫？今日彼氏とデートでしょ？」

ここ最近みゆに男の人の気配が無いから心配してたのよー？」

上野へと向かう当日出掛け前の慌ただしい朝

母さんはみゆの色恋沙汰の訪れに気分を舞い上げ

みゆは必要以上にソワソワとしていた。

『”彼氏でも無い奴”と会うのに何でそんなめかし込んでんだよ』

セレモニー時で学んだのか襟口が比較的狭く

膝上丈の裾がひらひらと揺れるみゆらしい薄ピンク色したワンピース

隆を警戒してか胸を覆うモヘアの羽織もの

「だって：こんな風にお出かけするの久しぶりで

何着ていいか分からないんだもん…」

そう嫉妬心剥き出しみしている俺へと向けたみゆのセリフを聞いて

ハッとする。

そう言えば…こうして行楽地等に連れて行ってやった事が今までに何度あっただろうか。

並んで歩く事は数え切れない程重ねた、二人共にした時間は計り知れない

だが、普通の恋人達のように表立ってする”デート”は片手で数えられる位に少なかった。

ごくありふれた女の楽しみを奪っていたのは…俺か。

「あら：？なら今日のお相手は彼氏候補かしら♪

アキも亜子さんと順調みたいでお母さん今日は気分がいいわ♪」

その明るい声に背中を押され家の扉を出ると同時にみゆはボソリと呟くみゆ

「アキ：結婚、しないよね？」

『ばーか。誰の為にあんな高い買い物したと思ってんだよ…』

そして横顔が見せる、僅かな涙で輝く瞳

たとえこれが制限だらけの関係だろうが、どんなに俺と隆が似た口説き方をしようが

その、涙の一滴まで。取られない自信は、ある――。

冬の訪れを感じさせる空気の冷たい風が頬を掠める休日の朝
みゆと共に家の門を出ると

平日の朝と同じ様に黒い外車の前に安東が立ち深く頭を下げ待ち構

えていた。

「お早う御座います専務とみゆ様
上野まで揃ってお出掛けとお聞きましたのでお迎えに上がりました！」

ああ：幼なじみの亜子から聞いたのか。

『今日は私用で出掛けるんだ。休日位休めよ』

「いえッ！そう言う訳には：

専務のお相手が亜子ちゃんと知り居てもたってもいられず：
いや、あの：どう言う訳か足が向いておりまして…」

このシドロモドロに連ねる言い訳混じりの台詞

目をあちこちに散らばせる焦りよう

照れ隠しで頻繁に頭を掻くモジモジとした女々しさ

なる程：俺とのデートが気になり

休日にも関わらずどう言う訳か迎えに来てしまう位亜子を気に掛けている訳か。

『安東、今日一日空いてるよな？送るついでにお前も一日付き合え』

安東が亜子への想いを胸に秘めているならばこれ程都合が良い事は無い。

「いやッそんな滅相も…」

俺はオドオドとしている安東にきつく鋭い視線で突き刺し

『——命令だ。いいな?』

またもや権力を振りかざす。

先日の朝同様亜子に調子に乗られたら堪らない。

あの時の様にみゆに我慢をさせたくは無い。

安東を混ぜる事でそんな状況を回避出来ると安心を与える為みゆに目をやるが

話を聞く所か道端にしゃがみ込み野良猫を撫でていたりする。

その様子を見て甦る犬物の映画を見させられた記憶：パンダと言いだ動物好きかよ：

思えば俺は今のみゆをさほど知る事無く気が付けば愛に溺れていたこの狂おしい程の愛しさは理屈では説明出来ないのだろう。
妹と知りながらも愛してしまったその事実がここに。存在するのだから——。

『：猫よりパンダだろ? 早く乗れよ、みゆ』

少しずつ互いを知っていけばいい

愛は変わらずここに。存在するのだから——。

近頃都会では目にする事が少なくなった自然に身を委ねる背丈の高い木々

冷えた風が隣り合わせの枝を鳴らす天然から生まれた音

車を置き自然に耳を傾けながら向かう先は集合場所である上野美術館の入り口

そこには早々と俺達を待ち構えていた人が居た。

「アキさん遅ーい！ 亜子5分も待っちゃったー」

セツトに時間の掛かりそうな毛先がくるまったセミロングの髪
Vカットに大きく開いた襟元

少しの風に舞うだけで下着が見えそうなミニ丈の白いシフォンのワ
ンピース

この寒さにも関わらず随分と薄着をした亜子だった。

「あれー？ どうしてタケちゃんもいるのー？」

『…たまにはのんびりさせてやりたくてね』

その俺の押し付けに不満面を表し小さな溜め息を吐いた後
亜子は思いついた様にみゆへ飛びついていく。

「あー！ そのワンピース凄い可愛い！ どこのブランド？

ねーねー” みゆ” って呼んでいい？」

「あっあああ亜子ちゃん！！ 年上のみゆ様に向かってそれは失礼だ
よッ！」

すかさずフォローを入れる安東の台詞に耳を奪われていた

みゆより下の若い歳で親が決めた政略結婚を強いられるとは…と
少々気の毒にも思えるが…

「でもアキさんと結婚したら亜子、お義姉さんになるしー」

それにしても鬱陶しい。

『結婚は望んでないんだよな？余計な事を口にするな』

そう釘を指しみゆに目を移すと

再び傷ついた瞳を隠した俯き加減で薄い微笑みを漏らす。

風がふんわりと舞い上げる思わず指を絡めなくなる程のサラサラとした長い髪

上半身を動かすだけでゆらゆらと揺らめくスカートの裾

その度に人目を惹き付けるしなやかに伸びた脚

頬のチークも意味を成さない儂い…微笑み

みゆのその姿はまるで幻想の中の少女の様に見えた。

そして最後に現れた隆は長年の付き合いを物ともせず俺をすり抜け真っ先にみゆへと言葉を放つんだ

「今日のみゆ…やたら可愛い。」

俺の想いを代弁する様に…。

『みゆを気安く名前で呼ぶな』

「仕方ねーだろー？ダブル桜木なんだからよ」

そうして俺と隆が火花を散らしている間にも

緑茶のペットボトルを各々に配布する為容赦なく割り込んでくる安東に

漲る戦意は喪失していくが

「ではでは美術館チームとパンダチームに分かれて行動しましょう！
集合場所は上野公園内の池周辺の売店でッ！！」

いきなりこの場を仕切り出す、確か俺の運転手。まるで遠足気分だな…。

「よし。パンダ見に行くぞ、みゆ
ほれ。また転ばれたらたまんねーからな」

二人のみが知る会話をしながらみゆに手を差し伸べる隆
差し伸べられた隆の手を見つめて悩ましそうに頬を赤らめる俺の女

見ているだけで居たたまれない。——ガシュツ：！！

「わあっペットボトルを握り潰すアキさん男らしいー！！」

浮いた声を上げ腕に飛びつく亜子等に構ってはいられなかった。

みゆの背後へと回りモヘアの羽織ものを潜り抜け背中へと手を伸ばす
そして服の上から密かに鳴らすホックの…金具の音色

「えっ！？あ——…っ」

『みゆ？何やってんだよ…』

咄嗟に胸を抱えてしゃがみ込むみゆに腰を屈ませ手を差し伸べると
真っ赤にさせた頬を膨らまし

恍惚色に染まりゆく疼いた瞳で俺を見上げヒッソリとこう呟く

「アキの：バカ……」

……そうやって。心も体も俺への欲望で一杯になっていればいい。

「おいおい。何も無い所で転ぶか？フツ…。
それで運転手ボーイはどっちに行くんだ？」

正直、隆が本当に休日を割きこの場にやって来るとは思わなかったんだ。

それ程みゆに入れ込んでいるのか？
特定の女に執着しないあの隆が？

『安東：パンダ好きだろ？——見て来い。』

「何かがおかしい」と気づいていた筈だった。

だが、俺は酷い嫉妬心に苛まれ隆と言う男の真意を完全に見落していた。

各々の目的を果たし集合場所の池付近で取る休憩時間
ベンチから遠目で追いかけるみゆの姿

隆への警戒心丸出しで緊張に強ばらせる口元は
このクソ寒い時期に七色のソフトクリームを手渡す安東が解している。

アイス片手に歳の近い安東と無邪気にじゃれ合い
揺れる水面が際立たせるあどけない笑み

俺の手の外で泳ぐみゆが余りにも光輝いて見えた時
己が与えた暗闇に気づかされる。

俺との茨道を歩むよりも

女としての幸せを追求した花道の方がみゆに似合っているのだろう
と思うと

今の少女同然のみゆに近寄る事は許されない気さえしてしまったんだ。

好きな女を遠目で追う愛しさは

「愛」と呼ぶには淡過ぎるまるで…「恋心」

「ねーねー！亜子あのアヒルさんのボート乗りたい♪」

そう言えば：幼い頃連れて行ってやった近所の公園で
みゆは池の鯉を眺めながらまだ乗れる資格を持たない
アヒルのボートを毎回羨ましそうに見つめていたよな。

それを不敏に思い年齢を重ね誘ってやった頃には既にアヒルへの憧
れは薄れ

妹が兄の手から離れた寂しさに胸を痛めていた、淡い：「妹」の記
憶――

『ああ…』

「ほんと！？亜子嬉しい♪」

その「妹」の面影を纏う亜子にみゆの「妹」の記憶を全て押し付け
たかったんだ。

この目に映るみゆを全て「女」の記憶として残す為に――。

だが：ボート乗り場で順番待ちをしていると

池の向こう側に立つみゆの今にも泣きそうな弱々しい視線に気づく

無意識に急ぐ足耳に届き始めるみゆと隆の声

「ちょっと：目にゴミが入っちゃって…」

「んなでけーゴミねーだろーが！」

そして小さな肩を抱こうとする隆に力一杯掴み掛かっていた

『気安く触んな。泣かせたのは俺だ。責任を取るのはお前じゃない』

その切なさの涙の行方を定めるのも。それを拭うのも。

永遠に俺だけなのだと言う自信は……脆くも、崩れ散りゆく：

#7 アマイ誘惑 一?一

side みゆ

アキと亜子さんが今2人きりなのだと思うと

パンダのたれ目が可愛いなんて言っている場合でもないのに
柚城主任と安東さんと3人で伺うパンダの様子。

きつと柚城主任の見張り役で強制的にパンダチームにされた安東さんは
気分よく写メを撮っていたりして、柚城主任は意外にもはしゃいで
る。

「みゆ見ろって!!」

笹の葉が気の毒に思えてくっ程やたら豪快な食いつぶり!」

彼は今日何をしに来たんだろう?

どうしていつも私に：アキに刺激を与えるようなことするの?
そう頭を悩ませている間にも「行こう」と言っさり気なく私の手
を取る柚城主任が

白い歯をキラリ輝かせた笑顔を真っ直ぐに向けるから
払いのけるタイミングをついつい逃してしまう。

でも、こうして男の人と手を繋ぐのは久しぶりですごく：緊張する
な……。

「顔真っ赤にする程意識してんの?俺の事」

誰のせいで……って。私、意識：してる——?」

すると、困った顔をする私の頭をゴツゴツした手がワシヤワシヤと撫でて

顔をゆっくりと近づけてきて視界にフと影を作る、少し腰を屈めた彼

『あの：今日はプライベートですよね？』

承諾印の為のキスの時とは正反対

押し付け感も強引さの欠片もない合意を求めるこの間は一体…。

「…………だから何？あのさ。仕事じゃなくてもすんだろ」

それは：どうゆう意味で——？

グルグルと頭を巡る疑問符、それでも刻々と迫ってくる唇
オデコにサラリと柚城主任の前髪が掛かったその時
2人の空間を遮る安東さんの声にハッと我に返った。

「そーいうのは僕がいない時にして下さいッ！僕、恥ずかしーッ！
！」

「運転手ボーイてめー：クビにしてやんぞコラ」

この時は結局、安東さんの天真爛漫さのお陰で

上野公園の集合場所に着くまでアキが怒るようなことはあまり：無
かったけれど…

キスをされる寸前でも、不思議と抵抗感が——生まれなかった。

上野公園内に広がるくすんだ緑色の池で

アキたちが既に来ていたことに気づかず休憩をする3人。

柚城主任は携帯灰皿を片手にタバコを吸っていて
またもや意外にも地球に優しい人だったことが判明！！

そして私は安東さんがくれた背の高いソフトクリームを手に
池を眺めながら優しい記憶を辿っていた。

思い出すなー：小さい頃お兄ちゃんたちが連れてってくれた近所の
公園。

アキは気づいてた？あのアヒルのボートに乗るの、あの頃私の憧れ
だったの。

私はその年齢を満たす頃になると、アキが乗せてやるって誘ってく
れて

たまらなく嬉しかったけど「見ててやるから一人で乗って来い」っ
てそう言ったんだよ？

私はアヒルを楽しそうに漕ぐ人のその光景が羨ましかったのに…。

でも：アキらしいよね。だってアキがアヒルに乗るなんて想像した
だけで笑っちゃう。

そうして堪え切れない笑いをプツと吹くと耳がキャッチする

ボート乗り場で遅い腕に手を絡めて順番待ちをする亜子さんの甲
高く弾んだ笑い声。

あの時：アキの性格を十分理解していたから私、泣く泣く諦めたん
だよ？

それなのに…。亜子さんとは”一緒に”乗るの？

私にしてくれなかったことを亜子さんにはしてあげるの？

今となってはどうでもいい過去まで私を悔しがらせる要因になるなんて

嫉妬って、ほんと…醜い。

だからこんな醜い表情をアキだけには見られたくなかったのに。

目が合うなり人をかき分けながら近寄って来る大きな足音

柚城主任の腕を掴むもの凄い剣幕のアキ

やがて後ろから響く…おねだり声

「みゆがどうかしたのー？アキさーん順番追い越されちゃうー！」

そうだよね…私、こんな時でも妹でいなきゃイケナイんだ…

文句の一つも言えないんだ…

『…っ何でもないの。邪魔しちゃってごめんなさい…』

いくら涙を滲ませてもアキにとっては”それ位”。でもねアキ…
涙は堪えられたとしても心はどうしても泣いちゃうよ…

ねえ。アキ…私は――？

「…そっじゃアキさんアヒルさんいこー？」

「――触んな。」

腕を引っ張る亜子さんの手を力一杯振り払うアキ

驚きと怯みの後に口をつぼめて八の字眉毛を作る亜子さん
それに目を見張る…パンダチーム

そして私たちに背を向けたアキはもう一言セリフを置いて歩き出す。

その、私を呼ぶ声は柔らかくて：2人でいる時みたいにかくて：大きな背中に引き寄せられて木の茂みまで誘導されていくけど

「泣く位なら何で”来る”なんて言ったんだよ…」

喜びにシッポを振り回していられたのも数分で、出て来たのはやっぱり呆れ文句。

でも：次に響く恋人への労りと私の頬を抱き寄せる手の温かさに

「泣かせてやるから。おいで——みゆ…」

涙腺はもう、崩壊しちやいそう。

「：亜子が原因なんだろう？」

え：「亜子」——？

ただの付き合いだって言ったのにそんな親しげに呼んでるの？

ユルユルの涙腺にクツと力を入れ何度も深呼吸を繰り返すけどこの頼もしい胸にワガママをぶつけてしまえば今にも涙が形になりそうで…。

『で：も亜子さんの機嫌損ねたら大変だよ？

それが分かって来たんだもん。私は、大丈夫…』

「随分と物分かりが良いんだな：我慢なんてらしくない事するなよ」

……ねえ、私らしいって何？

『我慢なんてしてない…』

私だっていつまでも”それ位”で泣いてる女じゃないもんっ!!』

この場でわんわん泣く子供みたいな私ってこと？

「……で？隆の前では泣く訳？」

『え…ちがつ…——』

「お前…可愛く無い。——…勝手にしろよ」

……そう言って。

抱えた頭を突き放して去っていくアキが残した僅かな風は骨に染み入る冷たさで私から逸らしたその表情はきっとそれ以上に凍り付いていた。

『ア…キ——…?』

ただ、少しでも。アキに近づきたかっただけなのにどうして離れて行っちゃうの？

乾いたセリフと一緒に、私を。置いていかないで——…

やがて土を踏みしめるアキの足音が途絶えた頃

枯れ果てた木々の狭間に一人ポツンと残された私に吹く浮いた声を運ぶ…風

「兄妹ゲンカってやつ？」

その心地よさに地面へ垂れ下がった頭を上げると

離れた大きな木に腕を組んで寄りかかる柚城主任が

私へと歩み寄ろうとしていて…まず、一目散に考えること。

”今、見られてまずいことなかったよね？”

兄妹での軽いハグなんてどうとでも言い訳できるしあの距離なら話し声すら届かない

けれどそんなことよりもちゃっかり兄妹喧嘩に見えていたことに寂しさが襲う。

だだをこねるワガママな妹、それを冷たくアシラう兄
こんな図は昔から少しも変わってないんだね…。

「こんな可愛い妹にそんな顔させてったく大人げねーあにきだな」

そうため息をつく間もなく、その柚城主任の言葉で脳内にリピートし出す

”可愛い”と私を突き放した針金のように硬いアキの声。

思えば：アキの口から”可愛い”なんてえっちの最中でしか言われたことない。

そうゆう時って気持ちが高潮してて

普段思ってる逆のことまで言えちゃうものなのかな…？

そんな男の人の勝手な事情なんて私には分からないけど
あそこまでズバツと言われちゃったら流石に凹む…。

だから涙腺爆発寸前で話を変えたくて
大きく吸った息を吐き出した勢いで思い切って謎を投げかけていた。

『さつきはどうしてキスを…?』

「したくなったらすんだろ」

えっそれはつまり本能垂れ流しってことですか——!?

「好きだの愛だのめんどくせーの俺、苦手なんだわ。

それを求められんのもマジになんのもめんどくせーし。理由がなきやいけねーの?」

だめだあ…この人の恋愛観にはついていけない…。

——でも。今までのちよっかいもさつきの未遂だったキスも

深く考える必要がなかったのだと分かってしまうと

警戒心も緊張も自然と薄れていく

「…よし。あにきの機嫌取り行くか!」

『——…っはい!』

奪われる物のその。大きさにも気づかずに：——。

この時は柚城主任のお陰で少し気分は晴れたけれど、その後は——
——散々。

柚城主任が私を気遣いお気楽な調子でアキに絡む程アキの表情は強
ばっていつて

腕を払われてからの亜子さんはアキの半歩後ろを歩きながら
たまに私をチラリ見てはムクレた顔を向けていた。

ボート乗れなかったの明らかに私のせいだよね…と

胸がチクリと痛む罪悪感の裏側で

その現場を見ないで済んだことにホッとしている安心感。

そして顔色の浮かない亜子さんを心配そうに見つめる安東さんは
パンダの写メを見せたりして健気にも機嫌を取ろうと必死になって
いたっけ…。

それぞれのペースで歩む帰り道

それぞれへの愛情を募らせ歩む、重く…鈍い足取り

それぞれの嫉妬が巻き起こす、波乱へと続く…道のり――。

「…珍しいわね？二人が喧嘩なんて」

時は変わり、週明けの会社帰り

家に帰りづらいことを理由に私は奈緒と絵里花を飲み連れ出して
いた。

「主に：専務プライドバリ高いもんねえ〜。この際先に謝っちゃえ
ばあ？」

あれから家に帰って兄妹の会話はいくつかしたけれど恋人の溝は埋
められないまま。

でも”喧嘩”って言える程お互いの気持ちぶつけ合ったワケでも
なくて…

『何を謝ったらいいかも分からないんだよね…』

見放されたように見える凍てつく眼差しを直視できなくて
こうしてアキから逃げている私は臆病者。

「単なる嫉妬でしょ？ みゆへの独占欲異常だし。
でもまさかそこまで新主任を意識するとはね：責任感じるわーご
めんよ！」

けれどこの奈緒の軽い謝罪の言葉までは難なく耳から耳へと通り抜
けていたのに
ある魅力的なキーワードに思わず両耳がピクピクと疼き出す。

「来週の”クリスマス”は？ 予定立ててなかったの？」

そう：目前に迫った高級マンションへの引越
新居でアキと初めて迎えるクリスマス

専務就任後の忙しい時期にワガママも言えないから
お部屋で2人まったり過ごせればそれだけで幸せを感じちゃう。

…はずだったのにな。

差し迫ったクリスマスの予定すら立てられないこの状況にげんなり
としていた時

絵里花らしいアイデアがテーブルを彩る。

「そーゆー時は甘い誘惑仕掛けてカラダで仲直りが一番だよねえ」

今のアキの冷たさを考えたらそんな雰囲気じゃないのに：と
私が長い溜め息を鳴らしていても、奈緒はその発言に何度も深く頷いて

「悪くないんじゃない？ 新主任を意識して機嫌悪いだけよきつと。
”可愛くない”が癪に障るからイヴ辺りに迫って”可愛い”って
言わせてやりなよ」

私の耳はというと、今度は”可愛くない”の響きに微かな振動を始めていた。

『…迫るってどうゆうこと？』

その疑問に2人が「情事への誘惑」と口を揃えたことに驚いてしまう。

いつもアキが強引に攻めてくれるから

それに流されて抱かれることが当たり前になっていたけど、私から

——誘うの？

「例えば私は熱っぽく見つめて”ねえ…シない？”——これだけ」

その艶めかしい流し目を向けられた私が熱っぽくなる。

いつもタカにいをそんな風に誘っててそしてタカにいはそのお色気に？

想像すればする程”お兄ちゃん”のイメージが壊れていくよ：

お色気ムンムンの誘惑は参考にならないと判断した私は
絵里花に話を振って危険な賭けに出してみた。

「目をウルウルさせてえ」 えっちな気分になっちゃったあ”
って甘えると男はイチコロリ！胸をスリスリは基本だからあ」

あな恐ろしや魔性の絵里花。そうやって沢田くんも手なづけたのかな？

私はきつと抱きつくだけで精一杯でそんな恥ずかしい誘い方なんて絶対にできないっ。

そう頭を思い切り横振りすると奈緒の優しい口調に安心感が宿る

「ま、専務はみゆなら何でもいんじゃない？

少しセクシーな下着つけて” みゆらしい一言”で十分だと思うわ。
後はシながらも機嫌取れば？」

そんなに簡単に言ってくれちゃうけど

アキに一度だって適ったことのない私がする誘惑なんて通用するのかな？

「イヴ：か…。」

程なくして私の話も一段落した頃、奈緒が寂しそうに呟くから改めて考えてしまう。

当日タカには家庭と恋人どっちとの時間を選ぶんだろう？

でもこの奈緒の表情を見る限りイヴが来る度に毎年我慢してきたんだろうな。

いくら奈緒が理解のある女でも

恋人たちにとって大切な日は一緒に過ごしたいって思うのが普通だ

よね…。

何か理由をつけて私がタカにいを連れ出せないかなと考え始めた時
またもや冴えたアイデアを煌めかせる絵里花

「ならあゝ引越祝いってことでえイヴ4人でクリパーしたらあ？」

”クリパー” ってまさかのクリスマスパーティー！？

「弟の引越祝いって言えば奈緒は副社長と会えるしい？」

みゆだって専務と2人より話しやすいよねえ？ 一石二鳥じゃ〜ん
♪」

…確かに。紗英さんには悪いけどそれなら2人を会わせてあげられるかも。

『私も奈緒たちがいてくれたら助かるな♪タカにいに聞いてみるね』

そして奈緒はゆっくりと微笑んで「ありがとね」と小さく呟いた。

絵里花もたまには貢献的なこと言うなあと思えば気分もいいはず
イヴは沢田くんのリザーブしたホテルでお泊まりらしく

この後延々とノロケ話の嵐だった。

——そして次の日

「これ。勝負下着として買ったんだけど私には物足りなくて一回も使っていないのよ。」

みゆ似合いそうだからよかったら使って？」

そう言って帰り際に奈緒から渡された紙袋

誘惑の方法で頭の中が一杯で正直下着にまで手が回らなそうだったから

こんな気遣いがすごく嬉しくて：

「私たちは早めにおいとまするつもりだから。頑張れ、みゆ」

友情って……あったかい。

なんて友達の有り難みにじんわりと瞳を潤わせながら
袋からそれを取り出してみたけど

『えっ……こんなの履くの！？』

てゆうよりこれで物足りないって……奈緒の満足のいく勝負下着がすごく気になるよ……。

#8 アマイ誘惑 一?一

side アキ

——ある日の夜、残業を終えて一風呂浴びた後居間に寄るとソファと組になったローテーブルでは、母さんが寝しなに作ったアテと

焼酎の水割りセットを広げた父さんが頬に彩りをつけていた。

こうして一人酒を注ぐ姿は

日本のトップクラスを誇る化粧品会社の社長には到底見えない。

それを見るなり、仕事以外での久し振りの父子水入らずに頬が緩み父さんが手酌をする焼酎のボトルに手を掛けると：

「…おお、アキ。お前も大分専務の役職が板に付いて来たな。

その後亜子さんとはどうだ？」

俺が風呂に入っている間に帰宅しただろうみゆが着替えもせずにソファで寝ている事に気づく。

あの上野以来みゆはこうして遅くに帰って来る日が増えた俺の視界から：逃げる様に…。

「くれぐれも亜子さんの機嫌を損ねないでくれよ。

篠原社長もそうだがアキにと紹介して下さった方の顔を潰したくないのでな」

……そう言えば、ホテルのレストランで会った時亜子もそんな事を

言っていた

「ある人」に聞き少し前から俺を知っていた」と。

そのシガラミがみゆにまで影響する事になるとは思いもせず、今俺は賭けに出ていた。

『…：大事な女がいるんだ。そいつの為なら専務の職を捨てても構わないと思ってる。

会社の為の結婚を…するつもりは無い』

「お前はタカとは違って昔から言い出したら聞かない奴だからな…」

俺の覚悟の言葉も包み込む大らかな感情を表す笑み
それと共に目の前にそびえ立つ父親と社長の威厳

「でもなアキ：正直な所、お前の縁談に我が社の命運が
掛かっていると云っても過言ではない状況なんだ。

みゆにまでは背負わせたくないものだ」

そして俺の覚悟をも揺さぶる深刻な事実と「みゆ」への負担

”普通の女としての幸せを与えてやりたい”とみゆを守りに入っていた父さんが

みゆの政略結婚まで視野に入れていたとは

我が社は相当切羽詰まった状況なのだと思ひ知らされるばかりだった。

やがて、「もう一度よく考えてみてくれないか」と最後再び念を押した父さんは

静かな寝息を立てるみゆの艶やかな髪を柔らかく撫でる

「この可愛らしさは大人になっても変わらないものだな…」

その父の娘への愛情溢れる微笑ましい光景に

最近忘れかけていた罪悪感が…津波の如く襲い狂った。

父さんと母さんが何十年かけて大事に育ててきた娘を

その兄である俺は今となっては躊躇いもせず、欲望のままに抱いている。

それは、まるで。普通の恋人と同じ様に、それが当たり前の事のように――。

『…寝かせて来るよ』

それ故か、過ちを露呈された場に耐え切れず

みゆの華奢な体を抱き上げ父さんに背を向けた。

俺は既に裏切る覚悟は出来ている

だがみゆに裏切らせる覚悟は未だ出来ずにいた事を改めて実感した瞬間だったんだ。

「んーっそんな下着らめえー見えちゃ…う…」

胸に響く甘えた寝言

無意識に俺の心地を感じ取り、首にしがみついた甘えた仕草

みゆを”可愛くない”等と思った事は一度たりとも無い。

俺にはどんなみゆも可愛く見えて仕方がない位だ。

あの時も、ああ冷たく突き放せば
可愛い泣き顔を見せながらすがりついて来るものだと思
っていたが

実際はそうではなく、みゆは青ざめた表情であの場に立ち竦んで
ただけだった。

それは妹が兄の手から離れた時の様な寂しさに加え
自分の女が手の掛からない女へと変化していくサマへのどうしよう
もない虚しさ。

隆への嫉妬をぶつけた訳ではない
みゆに怒っていた訳ではないんだ

ただ。そうして俺の手が必要にならなくなる事に――苛立ちを、
隠せなかった。

そうしてみゆの体をベッドに埋めると

静かに動く長いまつげ：俺を見た後に瞬く大きな瞳

「…っアキー？クリスマスねー：

タカにいと奈緒とアキのお部屋でクリスマスパーティーしょ？」

クリスマスは平日の為、仕事終わりにどう過ごそうかと考えてはい
たが

まさか兄貴達も一緒には言い出すとは思わず

俺を悉く避けようとするみゆに新たな苛立ちが生まれていく…：

――Xmas 聖夜の刻

俺の知らない所で企画された集まりの為、安東の運転する車にみゆと岩崎さんを乗せ

数日前引越を済ませたマンションへと向かう。

「タカは買い物があるらしいのよ。誰へのプレゼントかしらね…」

窓の外の聖夜：その中で華やぐ街の人々を恨めしそうに見つめ

極小の眩きを零す岩崎さんとは正反対に

表参道を彩るイルミネーションを羨ましそうに見つめ、瞳を輝かせるみゆ。

兄貴に押し切られパーティーと題した二組の密会は避けられなかった訳だが

みゆは真っ先に二人で過ごしたいと言っただろうと思っていた俺にはその状況を回避する手段としか思えず苛立ちは募る一方だった。

それでも時は穏やかに流れ：部屋に到着し鍵を開けると

家主の俺よりも先に部屋にズカズカと足を踏み入れる女達。みゆはともかく…

「たかが三十歳で億ションなんて凄い通り越して憎たらしいわね。

家具は全部イタリアメーカー：業者に一任したんですか？独身はやる事が違うわ」

その口諸共遠慮する振り位見せろよ…。

そして兄貴が注文したらしいデリバリーのオードブルが揃う頃両手一杯に酒を抱えた兄貴がやって来る。

乾杯用のシャンパン＞ペリエジュエ・ロゼ＜
食事と共に楽しむワイン＞ロマネコンティ・赤＜

最高級酒の特製を自慢げに説明する様子この張り切り様からして
パーティーを一番に楽しみにしていたのはどうやら…兄貴の様だっ
た。

すると、兄貴の買い物物が酒だった事に安心したのか岩崎さんの顔が
一気に緩み

俺も初めて見たミニスカートに手を掛けみゆをいじり出す。

「——キャア！ なっ…お！！」

「あーごめん手が滑ったわー」

真っ赤な顔を携えながら舞い上がるスカートを必死に手で押さえる
みゆに対し
しらっと棒読で交わす岩崎さん。

「酔ったオヤジかお前は」

ハイペースで酒を含む兄貴がすかさず茶化しを入れる。

ここ最近険しい表情の多かった兄貴がこうして本来の陽気さを取り
戻す姿を見ると

世間から閉ざされた「禁断区」も、聖夜の街と共に華やいで見えた。

「…タカ、今日は泊まれるの？」

禁断愛さえ聖夜に酔いしれる密室空間

雰囲気のあるホテルのバーの様な大人の世界を漂わせ兄貴が岩崎さんの肩を抱き

でかいソファで寄り添う男女。

人の家にも関わらず堂々とくつろぐそのイチャつき様は不倫関係にある秘密の恋人と言うよりは新婚夫婦。

「朝まで飲み明かす設定になってるから安心しろ？部屋も取ってあるからなあ」

なら早くそっちに行けよ…。

あの上野以来きこえない上に今日は一段とモゾモゾとして床から尻を浮かさずにいるみゆ一人を扱うだけで俺は手一杯。

紗英さんは今夜家で一人寂しい思いをしているだろうに

どっちにもいい顔が出来ている兄貴と言う男が理解不能だ。

俺には到底及ばない器用さだとある意味の感心を抱いたと共にこのパーティーの目的が明解になって来た頃、一本の余計な電話が入る。

「アキさんメリクリ♪今誰と何してるのー？」

今日はアキさんを独占したかったのになー。浮気しちゃダメだからね？」

くだらない誘いの度に会社にまで押し掛けられたらたまらないと連絡先を教えたのが間違だったんだ。

まるで恋人であるかの様に俺に接してくる亜子に耐えきれず

父さんの忠告も忘れ冷めた口調でトゲを刺していた。

『亜子に俺の浮気をどうこう言われる筋合いは無い』

「アキさんこの間から冷たい。」

クリスマスは誘ったらダメって言われたから我慢したけど亜子は
”婚約者”だもーん」

”言われた” って、誰にだよ…。

会話を成立させるのも面倒になり呆れついでに視線を泳がせると
みゆの姿が消えている事の弾みで亜子との通話を強制終了していた。

「アコ”だなんて親しげですね？」

今の専務に柚城主任に嫉妬する権利無いと思いますよ？

それに今の言い方だと浮気相手がみゆって言ってるみたいで最低」
「なんだ？ 柚城にみゆを取られそうなのか？ アイツいー男だしなあ。
ざまあ見ろ！！」

……だから、早く。帰れよ。

「みゆならアコの電話に傷ついて今頃洗面所だと思っていますけど。」

そうして洗面所の扉を開くと鏡に映る

肩を見せて着るのであろう襟口全体が大きく開いた白いフワフワの
ニット

サイドにリボンがあしらわれた巻きスカートであらう白いひらひら
のミニスカート

そのX'mas仕様の装いで涙を拭っていただろう手で前髪を整え出すみゆの辿々しい仕草

「あつと：飲み過ぎ：ちゃったかな？」

閉じた扉に寄り掛かり、二口の洗面シンク側の壁一面の鏡越しに目を合わせると

物憂げに俺を見つめては揺れる瞳を手で覆い隠すみゆが余りにも小さく見えて：

『——そうやって。いつまで我慢する気？』

儚さで消え入りそうな体を後ろから、柔らかく：——抱き締めた。

亜子の存在自体がみゆを傷つけている事も

あえて亜子を追い払わない俺に対し我慢を募らせている事も目に見えて分かるが

どう見てもその瞳は寂しさの雫を目一杯ため込んでいるのに俺の前で平気な振りをする事が何より——居たたまれない。

「アキを、信じてるから：」

こんな可愛げのある台詞を、そんな物分かりの良い台詞を、言わせたい訳では無い。

俺は何をしてやればみゆに素直な口を開かせてやれるのかとやり切れなさを抱きしめる手にギュッと込めた勢いで

肩から細い腕へと滑り落ちゆくニットの襟口

”信じてる”と言っておきながら小刻みに震える肩が愛おしく

その露出した真っ白な肌に唇を這わせ：滑らし：

辿り着いた先に除かせる下着の色に込められたみゆの思いが愛らしく
下着に指を絡ませると

みゆの手は敏感に反応しニットごと肌をサッと隠し出す。

「…待って！！ここ明るすぎて：やめて……」

『今更気にする事かよ…』

そして仕舞に見せた俺への抵抗の：一雫。

いくら抵抗を口にしようが常に俺に流されて来た奴が
腕で体を包んでまで俺を拒むこの態度に、優しさの心を失いかけて
いた——その時。

「ねえアキ：本当はあの縁談断るなんてできないんでしょう？」

俺の待ちわびた溢るる涙が：——零れ：落ちた。

#9 アマイ誘惑 一?一

side みゆ

この日まで付けるのを楽しみに取っておいた新作の香水も
風通しのよさに今も落ち着けない奈緒にもらった勝負下着も
亜子さんを意識して頑張って履いてみたミニスカートも

この口を開けばその頑張りの全てが――水の泡。

『タカにいいも断れなかった縁談話をアキはどう言って断るつもりなの？

それにつ：アキは一生：独身でいいの？』

私には会社の事情なんて分からないけれどこれだけはよく分かる。

”一緒にいるだけで幸せ”なんて私には何も無いから言えることで
地位も名誉も背負っているアキが私と紡ぐ秘密の関係は
アキの価値を下げるものでしかないってこと。

私たちの間で「結婚」を語るとはタブーなんだろうけど
亜子さんてゆう婚約者が現れて気付かされてしまったの。

アキの全部が欲しくてたまらない欲張りな自分に…。

完全に諦めていたはずの結婚を本心では望んでいた自分に…。

横に並ぶことさえ許されないのに婚約者だなんて名乗ってみたい。

一生叶うことのない結婚を約束してみたりしたい。

そんな欲が募る程に

その権利のない私の存在価値が薄れていく気がして…すごく怖い。

『アキは、どうして私なの？私といって…幸せ？』

「くだらない事言ってるなよ？」

……ほら。”我慢するな”なんて言っても

自信の底つく弱い心を見せたらそうやって呆れた声を出すクセに
慰め程度で私の傷口に触れないで。

『アキに釣り合う人になりたくて必死になってる私の気持ちなんて
いつも自分に自信満々のアキには分からないんだよ…っ。
私にとっては大事なことなのに…!!』

そう泣きべそをかいて半分ヤケになっていた時

突然耳に打ち付けたリビングから響く言い争いの声

その尋常のなさに洗面所の扉を開けた後に映る光景は

「帰るわ」と玄関に向かう廊下を横切っていく奈緒

追い損ねたようにリビング入口で頭を掻くタカにい。

「いやあな：今から紗英がここに来るって言い出したんだ」

え：紗英さんがどうして今頃――？

奥さんが来るって言うなら断る理由はどこにもないけど…
じゃあ奈緒は…：どうなるの？

「結局ね、最後は勝てないのよ。

愛がなくても結婚はできるけど愛だけがあってもだめなのよね…

みゆも手遅れにならない様にね？私達みたいになるわよ」

そう気丈に切なさを吐き捨てても

玄関扉を潜る奈緒の後ろ姿が寂しくて：痛々しくて：

それでも苦い顔をしているだけのタカにいのシャツを胸の位置でギュッと握った。

『奈緒を追いかけてあげて？じゃないと嫌いになるから！！』

タカにいの不甲斐なさに破談を実行できないアキを重ねてムキになる私

「帰りに酒でも買って来いよ。外に出てて手ぶらは怪しいだろ」

その私の激情をも鎮めるところまでも冷静なアキ

「みゆに嫌われちゃあなあ」

そして私を言い訳にしてようやく足を動かすタカにいの背中を見送っていた時

奈緒をフォローする間もなくインターホンが鳴り響く。

来たばかりの紗英さんは

表参道のイルミネーションを見たいとタカにいの手を引っ張るけど初めて好きな人とイベントを過ごせると

私にお礼を響かせた奈緒の想いがあまりにも儂くて

結婚で勝ち得た権力の大きさを前に、私は震えていた。

だから今アキと2人きりになってもこの醜い心を晒け出すだけだと帰り支度をして見せても

アキは私の手首を掴むだけで人前では愛を語れない、この秘密の關係の切なさには……

『私も：帰る――』

唇を噛みしめて部屋を出た。

原宿駅へと抜けるイルミネーションで華やぐ表参道
真夜中でも人混み溢れる奇跡に満ちた聖夜

タカにはスタスタと前を歩き

紗英さんと私は年に一度のクリスマスを惜しみながら歩道を歩む。

「アキくんと喧嘩でもしたの？だめじゃない。今日は一緒にいなきゃ。」

意地を張ってもいい事ないよ？」

そう：紗英さんは知ってる。アキと私の禁忌の關係を。

「ね、今日：岩崎奈緒さんも来てたんでしょ……？」

そして、タカにいと奈緒の……不倫關係も。

「みゆちゃん顔に出やすいね。いいの：分かった事だから」

奈緒とはまた違った奥さんの切なさに触れる度

パーティーを企画した罪悪感が胸をツツく。

「ただね？私の元に帰らなくなる日を待ってるだけの妻にはなりたくなかったの。」

みゆちゃんもアキくんを誰かに取られたくないでしょう？」

うん、紗英さんの気持ちよく…分かる。

縁談が纏まっていくのを黙って見てるなんてできなくて
それでもアキを困らせたくなくて物分かりのいいフリをして
今日だってアキの気を惹きたくて勝負下着にしたのに
…：どうして？溝は深まるばかり。

「みゆちゃん達の愛の絆は強くあってもらわなきゃ困るの！
応援してるから戻っ…、ほら。アキくんも仲直りしたいのよ」

ただ…純粹に。私たちの恋愛を応援してくれているのだと疑いもせず

この温かな優しさに励まされてじーんときていた時
私の肩の上から後ろを指差してタカにいの元へと戻る紗英さん。

後ろを振り返るとそこには

大勢の人が行き交う歩道に息切らせながらも一人堂々と佇む、私の
…：愛しい人。

「その不安ごと抱いてやるから：——俺から逃げんな。」

アキは受け止めてくれるの？ワガママな願望と醜い嫉妬で濁った心
ごと、私を…。

本当はね——？少しでもアキに近づきたくて「大人」への背伸びをしたのも

兄妹では決して叶わない関係を妬んで亜子さんを羨んでいたのもいつも。そこにあったのは、たった一つの。——「想い」

『アキ……！私ね——っ……』

キラキラと瞬くイルミネーションでボヤケた優しい微笑までの道のりは

駆けても：駆けても。遠く長く感じる

『アキを、ずっとずっと……っ』

私に向けて差し伸べられた長い腕

ギュッと握り合った手に引き寄せられて風を切る体

宙に舞う足が地に着くことなく抱き留められる……まるごとの私

聖なる夜に奇跡の力があるのなら私の濁った心を浄化して響かせて、届いて、抱きしめて。

『独り占めしていきたい——……。』

——この精一杯の「想い」を。

イルミネーションにかろうじて照らされた歩道

そのど真ん中で抱き合う私たち兄妹のことなんて気にも止めずに、足も止めずに

すり抜けてゆく普通の恋人たち

誰にも渡したくない居場所を守りたくて私は夢中でアキの体にしがみついていた。

「泣きながら言う事があるだろ？——言えよ」

：言っているの？言い出したらワガママも。嫉妬も。涙だって。

『“亜子”だなんて呼ばないで？番号なんて教えないでよ：』

もう、止まらない——。

『アキと仲直りしたくて勝負下着で誘惑しようって私は頑張ってたのにつ

こんな日まで亜子さんの電話に出るなんて：！アキの”彼女”は私だもんっ：』

なのに、呆れた顔を覚悟で涙に濡らした顔を持ち上げた先には思わず腰が砕けそうになる位の柔らかく：包み込むような笑顔

やがて逞しい親指は冷えた唇を愛撫して

乾いた唇は濡れた瞳にキスをして

白くも熱い吐息が運ぶ：小さな奇跡

「最初からそう言えよ。今のみゆ：一番——可愛い。」

その身に染み入る程の甘い音色は聖夜の鐘のように胸に強く、心に深く、鳴り響く。

『…子供っぽいついて思わないの？』

だから、ねえ？その返事が吐息のかかる距離で重なるこの笑みならば
大きな温もりで小さな心を包んで癒して、唇から伝う微熱で冷えた
体に火を灯して

そして愛もトロけるような——キスをして？

M e r r y X ' m a s アキ…。

アキと初めて過ごすクリスマス、人目を忍びながらも初めて腕を組
んで歩いた。

聖夜の奇跡が生み出してくれた刹那の魔法で隠される秘密
普通の恋人でいれるヒトトキ

それが嬉しくて：嬉しくて。
大好きな人を独り占めしながらアキの腕をグイグイ引っ張って歩い
ていた。

：：けれど。お部屋の玄関扉を閉めた途端にアキの眼差しは鋭く光
り輝いて
浮いた心も一瞬で吹き飛んでいく

「——で？勝負下着って？誘惑って？」

——あぁっ忘れてた！！

奈緒の好意でもらった勝負下着は

布とゆうよりは全部がレースで編まれた深紅のセクシーな下着で肌を覆い隠す面積の狭さと両サイドの極細の紐だけで保たれたショーツの危うさに

一日中落ち着かなかった。

けれどももう仲直りもしたし、甘い誘惑なんてもう必要ないと思ったのに…

「してみろよ……誘惑」

アキの厳しい眼差しは見逃しては、くれない。

『どつどんなベッド買ったの？』

だから今更恥ずかしくて出た遠回しでも見え見えな作戦

それにアキはフツと笑いを漏らしながらある扉を開けると

広々としたベッドルームにただ一つドドンと置かれたクイーンサイズズのベッド

「……気に入ったか？」

もしかしなくても私の為にこんなおつきいベッドを？

アキって、見かけによらず思考がやらしいよね…。

そんなことが頭の片隅を掠めても頭の中は誘惑のセリフで一杯。

でも色々考えていたはずセリフも本番になると

緊張が優先されてなかなか出てこないもの。

だからとりあえずベッドに向かってアキの体に勢いよくタックルを試してみた。

「お前な：ストレート過ぎだろ」

うっ：これじゃあ色気の「い」の字もない：。

ベッドに沈んで呆れ顔の後に

上半身を支えるように腰の後ろでベッドに両手を付いて悪戯な笑みを浮かべるアキ

「：それで？俺の上に乗って何してくれる訳？」

アキの太股にちょこんと跨って為す術をなくしている私

いつも主導権を握るのはアキで

その強引さに身を任せていればよかったから考えたこともなかった”えっちってどうやって始めたらいんだろう？”

こうゆう時奈緒や絵里花みたいな甘い誘惑のセリフを言えればその後は男の人がリードしてくれるんだろうけど：

「誘われてやるから早くしろよ」

こんな大きな態度で待ち構えられていると、どんどん言いづらくなっていく：

『……アキい：脱がせて？』

「甘えんな。見ててやるから：目の前で——脱いで見せろよ」

リードしてもらおうだなんてトンでもない話だったよ…。

廊下の照明が微かに入るベッドルーム

暗さに目が慣れて来た今では隠しようのない恥ずかしい下着

アキはただ冷静な瞳に私を映して

羞恥心を丸裸にされていく体を舐めるように見つめるだけ。

そんな余裕の素振りが悔しくて恥ずかしくてたまらないけど

それでも。愛に逆らえない弱みで仕方なくニットに手を掛けていく。

躊躇いながら裾を手で遊ばせて

引っかかるはずもないニットの大きな襟口を首で詰まらせてみたりして…。

「モタモタすんな」

アキは乙女心ってものを分かってない気がする！

「俺をジラしてるつもり？」

『ちっ：がうよ！私、亜子さんみたいに胸おつきくないし
アキの元カノたちみたいに色気だってないんだもん：』

何より：この下着が似合ってない。

「あのな：まったくだらしない事言ってるなよ？

中々脱ぎもしない女を前に今理性飛びそうなんだけど？
好きな女なら何でもいいだろ」

えっ：そうゆうものなの？

なんて何となくアキの愛を感じれて嬉しくてサッとニットを放るけど

「みーゆ：？このピンクの透けて見えそうでえろい」

耐えられない羞恥心で視線が届かなくなるようにアキにギュッと抱きついた。

優しくされたいのにそれだけでは物足りなくて。

丁寧に扱われないのにこのイジワルさと乱暴な強引さが
たまらなくアキの体を欲しがらせるのに

「ここまでして：誘惑の文句とか無い訳？」

自分から甘い誘惑を仕掛けるにはやっぱりまだ早かった私には

『……キス：して——？』

こうねだる位しかできなくて

もどかしさと欲求を募らせながらそのイジワルな唇で甘い誘惑を囁いてくれる

その時を——待ちわびるの。

「今夜は寝れると思うなよ？」

その吐息の熱さに奪われる準備ができていくカラダ
濡れた愛に溺れていくココロ

この腕の中で少しずつ大人になっていくから
だからもうちょっと。待っていて

——いつか：必ず。アキを困らせる位のとびつきり甘い誘惑を仕掛けてみせるから——：。

#10 アマイ誘惑 一?一

side アキ

クリスマスを意識したのであろう大きい編み目の赤い下着
そこから覗く真っ白な肌をこの手で恍惚色に染めたいと、欲望が――
――背中を押す。

『俺に見せる為に着てんだろ？覚悟決めて下も脱げよ』

確かに酔う程の色気はないが
普段は少女のようなあどけないみゆが着る色気のある下着は格別で
そのギャップで余計にいやらしく見えて仕方がない。

しかしそんなみゆはと言うと、下着姿を見られまいとして額を俺の
胸に預けつつ

スカートのサイドリボンに手を伸ばし

視線の届かないそれを手探りで必死に解いている。

「んしょ…んしょ…」

どうしてこんなにも可愛いんだろうな…。

見ているだけでも飽きないと言いたい所だが
このもたつき加減が妙に、更に。欲求を煽っていた

『みゆ…？早く触りたい。』

「ん！待って？今から心の準備始めるから…っ」

初めてでもないのにも関わらず

この初々しさと恥じらいは一体どこからやって来るのだろうか。
ここまでくると天然記念物級だな…

そしてようやく解けたリボン

立て膝をついたみゆの脚をハラリと滑り落ちるスカート

みゆのスローテンポがたまらず胸に唇を這わせると

この握り潰しそうな程柔らかい胸に触れた奴の顔が脳裏をよぎる。

『隆と上野では何も無かっただろうな？』

「ななナイよあるワケないよ！」

…：…つまりは、あったんだな？

「でもね？ 柚城主任で深く考えずに行動する人みたいだよ？

私にしていることも女の人に対するクセみたいなものなんだよきつと！」

”クセ”ねえ…。意図的には間違いないんだ。

だとしたら標的はやはりみゆか？それとも他に何かが…？
そう思考は働きかけても神経を活性化させているのは煩惱

『なー：このショーツのサイドの両紐解いたらどうなんの？』

今はただ…——みゆを愛したい。

研ぎ澄まされた聴覚が紐の解かれていく音を微かに捉えるだけで
——俺の「男」が欲情をする

加速する息づかいの合間に漏れる甘い鳴き声
体を調べる程に弓なりに反り上げていく腰
刺激を与える度に俺を呼び首にしがみつく仕草

「ん…あっそこっ、いや——」

指先を少し触れただけで敏感に反応をするみゆの「女」

『“いい”の間違いだろ？』

恥じらいながらも確実に乱されていくみゆの姿を目にする毎に
常識と非常識の均衡が崩れていく。

『そんなに力むな…力抜いてろ』

「っ——…んん!!」

愛せば愛す程、愛されれば愛される程
甘い蜜に溺れゆく女を描くみゆにどんな女よりも感じる色気
こんなにも愛しい空間を後ろめたい等と思える筈も無い。

『もつと溺れろよ…俺に。』

こうして俺達は振り返りながらも繰り返し、繰り返し。犯して来た
んだ

「も…だ、め…アッキ——!!」

——禁忌の罪を——

快感によがるカラダを愛に濡れたココロを抱き留め何度も柔らかく
キスを重ねると

みゆはきつと、こう。呟く

「幸せだなあ——：。」

そして俺はいつもこう思うんだ。

この制限だらけの関係を「幸せ」と言わせている事が何よりもの、
罪なのだと…。

甘い吐息と重ねる愛しい瞳

やがて泣き崩れるその愛らしい瞳

『……どうした？ そんなによかったのか？』

——気づいていた。

愛の快感に満たされ押し寄せる幸せが雫を彩るその、愛しさにも…。

「…こんなに好きなのに……っ」

——分かっていたんだ。

その先に連なるであろう兄妹として生まれ育ったと言う
一生消える事の無いタブーの雫が彩るその、切なさをも…。

今の俺にはその二つの想いを抱きしめてやる事しか出来ないが

『みゆ：？その涙の全責任は俺がいずれ取ってみせるから…』

唯一俺が知った「ある事実」を明かすソノ時

この雫に込められた切なさには全て愛しさに変えてみせるから。

『もう少し我慢してくれないか』

ただ：ソノ時ハ——時既ニ遅シ

俺の膝に跨りながら目の前でゆっくりと流れる涙は
今のみゆには意味不明であろう俺の台詞が拭っていた

「全：せき、にん——？」

ポカンと口を開け不思議そうに首を傾げ
その答えを：ある事実を。確実に求めていたがまだ、知らなくて：
いい。

その切なさを愛しさの雫へと変えた時に受けるみゆの代償は
——計り知れないのだから。

『いづれ：な…』

全てが壊れるその寸前に事の全てを打ち明けるから

だから：その時は
残酷な代償から受けた切なさをも消してやれる力をどうか：この俺
に。

そしてその後は今までに見た事も無い極上の笑顔を見せてどうか：
この愛を永遠に。

全ては、本当の幸せの為に――。

『クリスマス：欲しいもんあったのか？

お前が兄貴達を誘ったりなんかするから見に行けなかっただろ』

俺の深刻な表情を心配そうに見つめる瞳をはぐらかす為瞬時に話を変えると

「…そうだ！アキにX'masプレゼントあったんだ」

何かを閃かせ広いベッドを横切り脇に落ちた鞆の中を漁り出した。

満面の笑みで手渡された包みは赤いリボンのかかった長細い箱
見るからに中身が分かる形

みゆから初めて貰った物。そのネクタイの色は…

「アキいつも怖い顔してるから

これで少しは顔周りが華やかになるかなーって思ってた♪」

……ピンクなのかよ…。

自分で選ぶ事は永遠に無い淡いピンク色したネクタイを手に頬をひきつけていると

みゆは生まれたままの姿で俺の背中に手を回し
鼓動が重なる程にピッタリとしがみつく

「私だってアキを縛りたい…。」

こうしてネクタイに込められた健気な束縛心を垣間見てしまうと

それが例えピンクだろうがみゆに支配されるのも悪く無いと笑みさえ浮かんだ

そんなに不安ならばと俺は脱ぎ捨てた服に手を伸ばし取り出したある物をみゆの目の前にぶら下げる

『縛られてやる証にいい物やろうか…?』

特別の証を——ここに。

マンション売買契約時、不動産屋から受け取った二本の内の一本の鍵廊下から差し込む一筋の光がその表面を反射させみゆの大きな瞳は揺れていた。

「…この部屋の、合い鍵？」

『表面よく見ろよ…』

それは「合い鍵」では無く持ち主用^{マスター}に二本のみ作られたシリアルナンバーの刻まれた「マスターキー」

「私が：持っていていいの？」

『他に誰がいる訳?』

やがてその瞳を揺らすものは愛しさの雫へと変わり浮かび上がる——溢れる笑み

「どんなX・masプレゼントより嬉しいかも…っ」

指先で拭う光り輝く美しい涙
指の股に絡めるサラサラの長い髪
唇で口づける滑らかな首筋

みゆに触れる度に甘い匂いがほのかに香る

『これ：新作のフレグランスか？』

「うん！でも発売した商品とは違って業者さんが私に特別に作ってくれた

甘さをフンダンに効かせた世界に1コしかない物なんだあ」

そう頬に冷たい頬を寄せ猫がじゃれる様に甘えながら幸せに浸るみゆは

いつも。壊したくなる程に可愛い。

この愛しさに満たされた幸せをいつまでも感じていて欲しい。

『みゆ：？縁談を断るのも少し待ってくれないか』

俺にしろみゆにしろ目障りな亜子の存在をどうにかしたい所だがあの父さんの言い方からして今ここで俺が破談を持ちかければみゆにも縁談話がいくのだろう。そんな事は……絶対にはさせない

『きちんと考えてるから——待ってろよ？』

そして俺は「ある事実」に破談の覚悟を上乗せし

「秘密の恋人」の継続をみゆに強いたんだ

「…どんな時でも亜子さんより私を選んでくれる？私、アキの一番でいたいよ…」

『当たり前だろ?…約束する。』

なあ、みゆ：——教えてくれよ。

この時見せた愛しさの雫が

この時浮かべた愛に満ちた幸せが…本物ならば。

何故…お前は、俺ではなく。アイツを選んだ——？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5829q/>

甘く切ない愛しさを。

2011年4月2日12時31分発行